

ASLE-Japan / 文学・環境学会



NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2007, No. 23

【役員名簿 (2004-2006)】

代表: 生田省悟 (金沢大学)
 副代表: 高橋 勤 (九州大学)
 顧問: 上遠恵子
 事務局長: 小谷一明 (県立新潟女子短期大学)

事務局補佐: 岩政伸治
 (白百合女子大学)
 豊里真弓 (札幌大学)

会計: 高橋綾子 (長岡高専)
 辻和彦 (福井大学)

監事: 西村頼男 (阪南大学)

ニューズレター編集委員:

村上清敏 (金沢大学)
 林直生 (滋賀大学)
 山城 新 (琉球大学)

会誌編集委員:

太田雅孝 (大東文化大学)
 野田研一 (立教大学)
 高橋昌子 (三重大学)
 パトリシア・ライオンズ
 (愛媛大学)

山里勝己 (琉球大学)

コンピューターセンター:

岩政伸治 (白百合女子大学)
 北国伸隆 (萩光塩学院)
 山城 新

評議員:

池田志郎 (熊本大学)
 石幡直樹 (東北大学)
 伊藤詔子 (松山大学)
 上岡克己 (高知大学)
 関口敬二 (大阪府立大学)
 高田賢一 (青山学院大学)
 巽孝之 (慶応義塾大学)
 三浦笙子 (東京海洋大学)
 吉田美津 (松山大学)

研究助成:

稲本 正 (オークヴィレッジ)
 岡島成行 (日本環境
 フォーラム)
 生田省悟 (代表)
 高橋 勤 (副代表)

かくまの里から——新たな展望を切り拓くために——

代表 生田省悟 (金沢大学)

今は11月半ば、金沢はいかにも北陸の晩秋というにふさわしい季節を迎えている。低く垂れこめた雲、強風と雷鳴、突然の叩きつけるような氷雨、そしてまぶしい日射し。毎年のことながら、一日がそんなふうをめまぐるしく過ぎていったりもする。そして私の勤務場所である角間の地でも、窓から見える里山の雑木林が日ごとに代赭色に染まってゆく。代赭色という美しい言葉を知ったのははるか昔、学生時代のことだったが、その頃のさまざまな思い出に浸りながら眼前の風景に見とれてしまう昨今である。あの8月の酷暑が嘘のように。

さて、8月に開催された全国大会とASLE日韓合同シンポジウムについては、会員のみなさんのご尽力に心よりお礼申し上げる。その詳細については他の方々のご報告に委ねるが、とりわけASLE日韓合同シンポジウムにあつては、ASLE-Japan発当初からの課題とされた東アジアの連携がその第一歩を確実に踏み出したことをすなおに喜びたい。高銀氏の講演で幕が開き、ゲーリー・スナイダー、高銀両氏による詩の朗読会で閉幕した三日間が、私自身にとっては言い知れぬ感動の連続であった。なお、現在は日韓合同シンポジウムの成果を踏まえつつ、環境文学(研究)の意義を問う出版企画が進行中であることをご報告しておく。来年の春頃の刊行をめざし、シンポジウム実行委員会を中心に鋭意作業中である。しかしながら、このような一連の事業が決して私たちだけの力で実現できるはずもなかったということ指摘しなければならない。私たちのささやかな試みに深い理解を示し、惜しめない助成の手をさしのべていただいたロレックス・インスティテュート、トヨタ財団、日本万国博覧会記念機構、日韓文化交流基金、そして東香山大乗寺には、この場を借りて改めて感謝申し上げます次第である。

さて、私たちの活動を今後どのように進めてゆくべきなのか。東アジアにおける連携のネットワーク構築はその一環であり続けるのは間違いないが、他にも取り組むべき領域は少なくない。たとえば昨年の全国大会で取り上げられた「環境正義」。これが法学、政治学あるいは経済学といった領域の研究と接続されるなら、どれほどの成果が得られることだろうか。その意味でも、私たちの活動をさらに開かれたものにしてゆかなければならない。

人文社会系における環境関連の動向を管見するだけでも、会員のみなさんが研究対象とする書き手への言及が決して少なくはないこと、必ずしもそれが厳密ではないことなどが窺われる。私たちが積極的に発言すべき余地はまだまだあるということだ。日々の研究に専念し、水準を高めてゆく努力は当然ながら、他方で、自分自身の課題を分かりやすく語り続けてゆく責務。その継続によってこそ、多彩な顔ぶれからなるASLE-Japanの存在意義をめぐる展望が拓かれるはずだ。会員のみなさんのさらなるご活躍に期待したい。

さる8月19日より21日まで、金沢市文化ホールならびに大乘寺を会場として、日韓合同シンポジウム「場所、自然、言葉―日韓環境文学の〈いま〉を考える」が開催された。ゲストスピーカーとして高銀氏、ゲーリー・スナイダー氏をお招きし、講演者として内山節氏、コメンテーターとして加藤幸子氏、管啓次郎氏にお越しいただいた。韓国、アメリカ、台湾から20名を越える参加者があり、日本側からも北は北海道から南は沖縄まで、50名を越える方々が参加してくださり、大会準備委員の予想をはるかに上回る大盛況であった。三日間にわたる大会の様子を、それぞれのセッションごとに、参加者に報告していただいた。(編集部)

高銀氏講演を拝聴して

横田由理 (広島国際学院大学)

「一杯のお酒が欲しい」という言葉の後、「八月の太陽は根源の光である」という高銀氏の詩の世界そのもののような強靱な言葉で始められた講演は、第1回日韓シンポの幕開けを見事に飾る格調高いものであった。古今東西、特に東アジアの環境に関する文学史思想史から数々の例を引きながら語られた奥深い内容は、わずかな紙面では語り尽くせないがその一端を出来るだけ忠実に報告できればと思う。

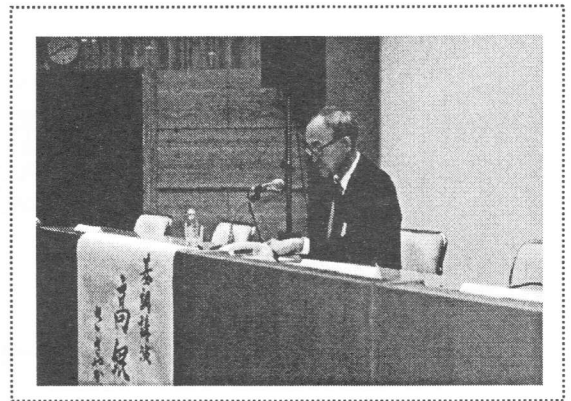
まず開催地金沢という場所に思いをはせられ、その代表的な女性歌人である「加賀の千代」の辞世の句、「月を見て、我はこの世を、かしくかな」を紹介された。理想的日韓関係のシンボルとされる朝鮮通信使との交流という歴史が、この句の生まれる背景となったことに触れられ、詩人の持つ国際性を指摘されると共に、その関係が今回のシンポの開催とも連動すると述べられたことは、このシンポに対する高銀氏の希望と祈りがこめられているように感じた。

次に、あえて辞世の句を取り上げたのは、挽歌的な自然観を表出したいがためである。これまでの文学の「自然は永遠である」という視点は虚構であり、変化こそ自然の本質であり、滅びの可能性を見せ始めた自然に対し、今、自分は絶望と一筋の夢の接点に立っていると云われる。人間は本質的に創造者であるより破壊者なのかと問われ、様々な環境破壊の現実に触れた後、60年代より文明批判の一環として追及されてきた文学と環境の関係が、生存のための利己主義にすぎなく自己中心的な議論のための議論に留まるなら、傲慢な開発主義と変わらないと自らへの戒めの重要性を指摘された。

次に「環境」の定義を問われ、人間の作った概念である「環境」は老子の述べる「自ら然り」の域に達していない。環境とは絶対的状況としての生命(死滅)の基地であり、万物の関係の連続線上で人間は受身であり、そうした原点から人間を問うべきであると述べられた。文学が人間としての限界を脱却できない状況の中で、自然と文学は絶対的終末に向かっており、詩の内部にも自然の終焉がしみこみ、詩の呪術は既にその効果を失っている。そもそも人間が言語を得たことが自然との乖離の第一歩であり、文学は自然を対象化している自己制約を越えられるだろうかと問われた。

インドのウパニシャッド讃歌は人間が宇宙の限られた言語しか使えないことを教えており、これは人間が自然から排斥されている証拠であると言われる。自然を唯我論的に他者化した行為の結末であり、環境と文学は統合されるべきであって、現代の生態主義文学もエコロジーの明文主義を超えることが課題である。自然の意匠化を乗り越えるということは、自然の本質と同化し、「言語同断の境地」、荘子の言う「意を得て言を忘る」の究極を極めることだと言われる。又、西洋の自然礼賛の限界を超え、無為の行為により成し遂げられる言語活動、すなわち人間の言語から自然の言語への回帰を提唱され、文学的束縛から解放され、言葉を否定した言葉、言葉の外にある言葉で語られる新しい詩を待望すると述べられた。

1960年来のエコ・ポエムの中で重要とされる多様性は文学の未来に関わる文明の多様性と相関しており、一つの支配的文明に対抗する多様性、特殊性の維持が重要と指摘された。人間中心の自然観を超越した天地万物一体という思想につながる円熟した自然思想、「人間の自然化」という生態論が必要であり、資本主義と一緒にあったこの肉体の時代にこそ「精神の生態学」を積み重ねなくてはならないと言われる。自然の基本は音にあり、音によつ



て不殺生、自然敬愛の精神、自然に報いることを教えてきたが、商業主義、資本主義といった死の論理が人間を無明そのものに陥らせている。私の詩が私から離れていくとき、人間の言葉は自然の言葉に帰ることが出来るのかと自問された。そして、最後に再び千代女の辞世の句を読まれ、終焉感と一縷の希望と祈りと入り混じった詩的余韻の中、聴衆の声にならないため息と共にこのすばらしい講演は終了した。

付け加えると質問タイムのとき、質問されたN氏への親愛を「沖縄の風の中にも一緒に立った」という詩的な言葉で述べられ、講演の初めスナイダー氏を兄弟のように慕っていると語られたように、幾度かの投獄という過酷な運命を超え不動の人間信頼と人間愛を寄せられる姿に、文学者として人間としての高銀氏の大きさが伝わった見事な講演であった。

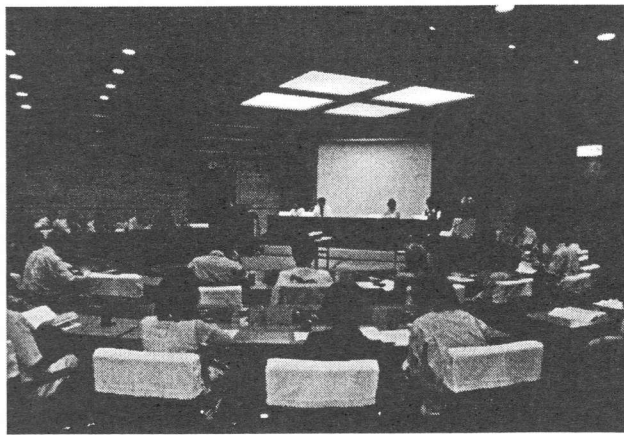
ASLE 日韓合同シンポジウム

セッション1「日韓環境文学における自然の詩学」報告 2007年8月19日

村松直子（青山学院大学・院）

ASLE 日韓合同シンポジウム初日、「日韓環境文学における自然の詩学」という共通テーマの下に、河野千絵氏、^{フヒユエジユン}許惠貞氏、^{ホンヨンヒ}洪容憲氏、森田系太郎氏の四名による研究発表が行われた。

まず日本大学・河野千絵氏による「築地正子の短歌一個の自然・孤の自然」と題する発表があった。築地が詩作を始める前後の経歴が紹介され、彼女の自然観の変遷が詳細に考察検証された。佐佐木幸綱が築地を「孤高の歌人」と呼んだように、彼女の初期の詩には、人間の寂しさを一顧だにしない自然淘汰の厳しい現実を直視する姿勢や、自然の中にあっても慰められ得ぬ孤独感、自然と自己の断絶が表現されていると氏は読み解く。だが、その自然観は、「歌人の鮮烈な孤独ゆえに桜の花の個の輝きが映える」（予稿集）一首を収めた歌集『鷺の書』を経て次第に変化し、最終的に、築地の自然観は、人間の「我欲を離れた心が見せる、穏やかな共存者、同伴者」、「永遠性」を内に秘めた「生命賛歌」（予稿集）へと結実したと氏は主張する。こうして築地の自然との邂逅は、詩人自身の「個」の保持と「孤」の受容とパラレルなものであったことが見事に論証・考察された。「近代以降の詩における自然は、人間と自然の対等な緊張関係の中で生まれた」（予稿集）とする氏の考察は大変興味深いものであった。



次いで韓国サイバー大学・許惠貞氏からは、『アラビアン・ナイト』、シルク・ロード、そして『處容歌』におけるエロスのモチーフ」と題する発表が成された。許氏はまず、朝鮮詩『處容歌』と説話集『アラビアン・ナイト』の共通性について、両作品におけるエロティシズム、性的逸脱と配偶者の裏切りというモチーフ、音楽、舞踊等に焦点を当てて比較検証した。次に、氏は中世アジアにアラビア文化が伝播されていった事実を歴史的・文化的背景に照らして実証的に紹介し、従来朝鮮民話と見做されてきた『處容歌』の中にアラビア的要素が取り込まれた可能性を考察検証した。『アラビアン・ナイト』を起源とする女性の性的逸脱と配偶者の裏切りというテーマ自体が、女性、生命、および世界に対する理解を促し、人間を悟りへと導く働きをすると見る許氏の解釈は極めて新鮮であった。中世アジア文化がイスラム文化、インド文化の流れを汲むとともに、地球規模で様々な文化的層の上に軌跡を残したとする本発表は、これまで文化的ボーダーと地理的ボーダーを殆ど同一視してきたアジア文学のテキスト研究に新たな視座を提示したと思われる。

続いて行われた^{ヒョンヒ}慶熙サイバー大学・^{キムジハ}洪容憲氏の発表は、「金芝河の詩の世界とエコロジー的想像力」と題するもので、1960年代以降、生命を尊重する韓国の伝統的な思想や再生の文化が「国の産業的発展」の名の

下に破壊されるなか、金が「生命に価値を見出す思想」(予稿集)を身体を張って保守したことが紹介された。金は獄中で埃から生えた草の葉に胸を打たれ、「一つの命は広大な空間を占めることができるのだ」(「灼けつく渴きから命の海へ」)と感じ、個の命を超越する宇宙的な命の存在を彼自身の内に確信するようになったと洪氏は解釈する。環境詩は未だ、環境破壊の現象に対する風刺や批判、原因を示唆するに留まり、理性的な代替案を提示できないままであるが、それに対して金の詩は代替案と成り得る可能性がある。金は、近代後の文明社会において、動植物にも、無生物にも、人間の内部にも創造主=霊的存在が宿り、無生物と人間さえも一体であるとする宇宙的生命観に立つエコロジカルな自然観を抱くが、この自然観こそが環境破壊、アイデンティティ喪失の危機等の問題解決の糸口を与えるとの洪氏の見解は強い説得力を持つ。本発表は環境問題に対する文学の役割についても私達に問うていると感じられた。

本セッションの最後を飾ったのは立教大学・院・森田氏の発表「クイア・エコフェミニストでエコポエト? 一詩人・伊藤比呂美を読み直す」であった。森田氏からは、「自然」という概念を「外なる自然」/「内なる自然」の二元論で区分する場合、性 sex/gender/sexuality の問題は後者に分類されること、また、従来日本の環境文学は前者を扱うネイチャーライター達を偏重して扱ってきたことが指摘された。「内なる自然」を描く作家と見做されがちな伊藤がじつは上記両方の自然を扱う作家であることが作品『河原荒草』を取り上げながら紹介され、さらに韓国で伊藤の作品に類似した作品を生み出す環境詩人・崔勝鎬と伊藤の作品が比較考察された。『のろとさわ』「レズビアニズム」の章で伊藤が描出したクイア性 queerness の明瞭な分析に基づき、氏は、伊藤比呂美をネイチャーライター・エコポエト、そしてエコフェミニストとしてのみならず、クイア・エコフェミニスト・エコポエトとして再定位した。また本発表は、従来のエコフェミニズム批評が異性愛主義に立ち、クイア性を見過ごしがちであった点を指摘し、近年の研究動向を踏まえながら、今後のクイア・エコフェミニズム批評の射程も明確に照射するものであった。

読書会

西村頼男 (阪南大学)

第1日目(8月19日)の夕方6時50分から8時40分まで約2時間にわたって行われた。司会者のブルース・アレン氏の「新鮮味のある解釈を期待します」という言葉で始まった。まず日本の大学院生3名が各自、10分間の発表を行い、それに対する韓国の大学院生のコメントを受けた。後半は韓国の大学院生の発表に対して日本の大学院生がコメントを加えた。

中村優子/二つの線:「Hyonjong Chon 作 “That Curved Line” が描くもの」

発表者はこの詩のキーワードである curved line は自ら曲がった、あるいは、超越的存在によって曲げられた線を示唆すると解釈する。この詩に牛(平和、農民・平民のシンボル)と馬(戦争、兵士・官僚のシンボル)の両方が登場する意味は両者の共存を示している。3箇所 of the lines と最後の that curved line に注目して、最後のみが単数形になっているのは生態系の円環関係を象徴したと考える。

山本洋平/二つの思想:「Kim Chiha 再読—政治的コミットメントと環境意識の架け橋」

この発表は昨年の発表に続くものである。キム・

ジハは1960年代および1970年代に独裁政権に反対する抵抗運動に深く係わり、「政治的詩人」として知られた。しかし、それから30年以上経た現在、彼は「環境詩」の詩人である。彼が「直線的な時間」観念を抱かず、万物は相互に関係していると考えていることは“Cracking the Shell”にも現われている。この詩において月や星は身体と結びつけられているが、韓国の詩における身体への強い関心は次の発表者(森田)も指摘する通りである。キム・ジハが再生を主題としている詩人であることは第3スタンザと第4スタンザに明確に現れているが、彼の環境詩には政治的意図は込められていない。“エコ・ブーム”とも呼べる今日、彼は“In the Past”においてわざと「おおげさな言葉」を使っている。

森田系太郎:二つの自然:「Seungho Choi を読む:(外なる自然)と(内なる自然)をつなぐ試み」

この発表は午後の発表(“Ito Hiromi, Seungho Choi, and Ma Kwang-Soo”)と相互補完的なものである。発表者は第一に、チェスンホの詩「コンビナート」を取り上げて、「外なる自然」(=自然環境)と「内なる自然」(=身体)をつなぐ詩人の試みを分析する。この詩には環境破壊を示す記号が多く用いられているが、「内なる自然」も破壊される。第二に、発表者はこの詩から日本の詩人伊藤比呂美を連想する。伊藤はチェスンホと同世代である。伊藤は「髪」、「乳(房)」、「子宮」などという「内なる自然」を取り上げるが、これはチェスンホと共通する。特にこれからの日本の環境文学は身体論にも焦点をあてる

必要がある。

LEE Kang Sun/「石牟礼道子『苦海浄土』における文学的技巧の分析」

発表者は、環境汚染は自然ばかりか人間をも破壊することを示すために、この作品を支えている三つの視点を取り上げる。すなわち、水俣病患者の視点、窒素株式会社と日本政府、および、結核病患者の視点、そして、医療に関する報告を伝える新聞の視点である。作者の意図は第二の視点に立つ人々に環境の危機を認識させることにある。作者はこの目的を達成するために意識の流れやフラッシュバックの手法を用いていると、論じる。石牟礼の立場をめぐって発表者とコメンテーター（山本洋平）との間で意見が交換された。

LEE Young Hyun/「山尾三省を読む」

山尾はソーと同様に肉体労働に価値を見出し、「手の文化」を重要だと思っている。また、現在見られる「単一文化（モノ・カルチャー）」への動きに対して、文化の多様性こそ必要だと説いている。山尾は「二十四節季の風景」において、「線的な時間

と「円環的な時間」を比較することで、「文明化の線的な時間」観念がわれわれを昔よりも幸福にしているのか問いかけている。チェルノブイルの灰が降っても、ジャガイモを掘ることで生命を救いたいと、山尾は願う。

KANG Yeon Haun:「宮沢賢治を読む——ふたつの世界を越境する」

発表者は「なめとこ山の熊」を取り上げて、(1) 狩りと(2) 言語の観点から論じた。(1) 小十郎は生計を立てるために熊を殺すが、作者は、それは小十郎にとって避けられないことだと黙認していると思われる。作者は、仏教の場合とは異なるが「布施」の考えを通して、人間と動物の理想的な関係を措定しようとする。(2) 熊は小十郎の話すことばを理解するから、両者のコミュニケーションは問題がないように見える。しかし、ここには言語帝国主義があり、「名前を与える者」と「名前を与えられる者」がある。作者は自己（人間）中心主義の危険性を訴えている。

内山節氏講演 報告

「当然のものにたどり着いて、落ち着き、ふっと軽くなったような感じ」

北国伸隆（萩光塩学院）

〈わたし〉とは何か。自然（世界）とは何か。死と生をめぐって、それらはどのようにかわるのか。—— 哲学や宗教が、永遠の課題とするところである。

わたしはこの夏、そのひとつの解答、もしくは解答を得るための重大なヒントを、内山節氏の講演からいただいた。森羅万象を神とを感じるような、具体的にいうならば、波に洗われカラカラ乾いた音をたてる珊瑚の骨片を「これがぼくの神なんだ」と感じるような、あるいは薄桃色に透けたサクラガイが風に飛ばされ砂に混じるその瞬間、〈わたし〉が世界へ溶け去るのを感じてしまうような、なんとも名づけえぬある実感の出自を、示していただいたのである。

まずは、概略である。

内山氏の講演は、明治以降近代日本の方向性が誤りだったのではないか、それは敗戦によってさえ改まらず、現代にまで至ったのではないか、という問い掛けから始まった。次に、日本の伝統的な自然観とは何なのか、以下の事項を考察することによって論が進められた。天台本覚思想、柳田国男の民俗学、「しぜん」と「じねん」、親鸞の自然法爾思想、「恵みとしての自然」と「禍としての自然」、および修験道。最後に、日本の伝統的な自然観の現代社会変革における有効性が説かれた。あとは、質疑応答の際、「自分の意思」をめぐる重要な提言があったことが忘れられない。

日本の伝統的な自然観とは何か。以下、天台本覚思想を中心に、内山氏の論を紹介する。

「山川草木悉皆成仏」という言葉がある。元々、仏教が生まれたインドではこれは「一切衆生悉有仏性」と言われていた。人間はみな生まれながらにして仏性を持っている、という意味だ。これが中国、朝鮮半島を経由して日本に伝来すると、天台宗の中で「草木国土悉皆成仏」となり、さらに人々の中に広く浸透していくときに「山川草木悉皆成仏」と変化した。「草木国土」と「山川草木」は同じ意味と考えてよく、日本では、人間だけではなく、生命ある自然も、生命のない自然も、すべて仏性があり、成仏できる、となったのだ。

これが天台本覚思想で、鎌倉時代に浸透したのだが、内山氏が着目するのは、人々がこの言葉を「すべての自然はすでに成仏している、ところが人間は成仏できないでいる」というふうに理解した点である。自然はすでに悟りを開いた尊敬

すべきものであるのに、人間はいまだに悟りを開けずにいる悲しい存在だ、という自然を人間よりも上にみる発想がここにあるのだ。

旧来日本の仏教界では、天台本覚思想のネガティブな面（人間は生来仏性をもっているのだから修行は不要であるという誤解・墮落を生みやすい面）が強調されてきたが、内山氏の解釈はいたってポジティブである。現実社会において実行力を伴う哲学者による天台本覚思想の肯定に、わたしは注目し、今後の更なる広がり（たとえば道元をはじめとする禅門への言及）を期待している。

以下、駆け足で内山氏の言葉を聞いてみよう。

1：自然は、「しぜん」とも「じねん」とも読む。もともとは「じねん」。「しぜん」は明治期にできた翻訳語。「じねん」は「おのずから」という意味。「しぜん」は最も「じねん」なもの。人間は〈わたし〉をもっているから「おのずから」（＝じねん）のままに生きられない。

2：親鸞の自然法爾思想では、浄土とは「じねん」のことであり、阿弥陀様とは「じねん」の化身。人間は自然に導かれながら自然に還ることによって悟りを開き、成仏し、神になる。

3：柳田国男によれば、人間は死ぬと魂が自分の暮らした村の森に還る。そこで自然の力を借りて魂を浄化。すっかり清浄になった魂は自然と一体化し、仏となり、神となる。

4：自然＝恵みの神＝荒ぶる神。矛盾を受け容れる知恵。

5：明治初期、神仏分離令と修験道廃止令。日本の伝統的な思想の否定。修験道は、言葉を必要としない、自然に還ることを究極の目標とする宗教。「人間」を死に追い込んだとき、「自然的な人間」として再生される。

6：明治～現代。元々の自然観の忘却。大きな繁栄とともに、大きな喪失感。敗戦（1945）とは、明治以降の考え方が敗北したのではないか。

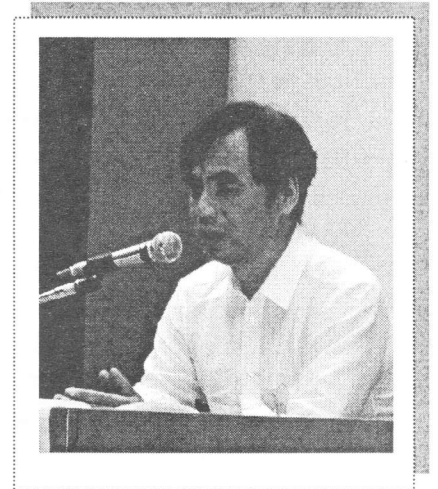
7：質疑応答。「自分の意思」というのは、自分の内部から出てくるのではない。自然から、村から、他者からの働きかけが、自分を通じて、自分の意見として出てくるのだ。他者があってこそ、わたしの意思・自由の発想ができる。わたし・自分に囚われると、逆に不自由になる。

……なんだ、わたしが感じていたのは、古層的な日本のわたしの中での生き残りだったのだ。

今まで、ずいぶん遠くを探してきた。地理的にも、精神的にも。でも答えは、こんな近いところにあったのだ。自分の内部、深いところ。……

常々わたしが感じていたことに、それでいいんだよ、と内山氏に言っていただいた気がした。

それは、激烈な喜び、ではなく、当然のものにたどり着いて、落ち着き、ふっと軽くなったような感じだった。



セッション2 「場所の感覚」

巴山岳人（東京都立大学・院）

穏やかな語り口による内山節氏の講演とそれに続く意見交換により、部屋の空気が温まりつつあったところで、2日目の最初のセッションである「場所の感覚 (Sense of Place)」は始まった。司会者であるイ・ナムホ氏（高麗大学）が発表者三名をそれぞれ紹介した後、1人目のカン・ヨンキ氏（全南大学校）による『風水』における環境意識が行われた。カン氏の発表の要点は、韓国独自の風水理論である「裨補 (bibo)」風水における自然観と、A・ネスによるディープ・エコロジー (DE) 思想との接点を探る試みであった。DE 思想は、自然と調和したより良い環境の構築に、人間が積極的に介入していくこと、いわば管理の役目 (stewardship) を果たすことを求めている。裨補風水もまた、社会における欠如を「氣 (gi)」で補うために、人間に自然へと介入することを促す。氣とは直感で感じられる生命的な力とでもいうべきものであり、人間と自然とがお互いに相補的に得るものである。場所によって氣の強弱もしくはその性質はそれぞれ異なるのであり、よって人間はそのような相対的な氣の流れを自らに合うものとするために、場の環境へと介入しそれを変化させなければならない。しかしその人為的介入は環境破壊的なものではなく樹木や岩石を利用して行われ、DE 思想と同様に環境との調和を志向したものである。ホワイトボードに図を書きながら、時に情熱的な口調で話し掛けるカン氏の議

論は、日本人にもなじみのある風水についてのものでもあり、大変わかりやすいものであった。

2人目はキム・イルグ氏（韓南大学）による『水の子』、『シム・チョン』、『バリ女王』のエコロジカルな比較研究であったが、キム氏は予稿集の英文を、時間の都合でところどころ省略しながらそのまま朗読するというスタイルで発表を行った。今回のシンポでは参加者は予稿集をあらかじめ読むことが前提となっており、このような発表形式はフロアとの意思疎通を図るという点において、いささか問題があったように思える。キム氏は子供と自然という主題に焦点を合わせながら、東洋と西洋の民話や妖精物語を比較的に検証した。そこでキーワードとなるのが水である。扱われた3作品とも世俗的な事情により入水することでいけにえとなる子供達が、最終的にはエコロジカルなヒーローやヒロインとして再生する様を描いている。すなわちそれぞれの事情から社会のアウトサイダーである彼らは、現実と幻想の入り混じる魔術的な空間もしくは自然の象徴としての水をくぐることで、超自然的な能力により社会的不正を正すのである。東洋の2作品（『シム・チョン』『バリ女王』）においては、忍耐や利他主義といった女性的美德が自然と調和して解決法を生み出すのに対し、西洋児童文学である『水の子』は、キリスト教的倫理の回復によりそれを行う。しかしどの作品も、子供が水を通じて他の生命形態に変容する様を描くことで、自然もしくは他の創造物との共生の意識を喚起する作品となっている、と結論付けられた。

3人目の発表は小谷一明氏（県立新潟女子短期大学）による「向かい風と返し風—在日歌人李正子の「風」を読む」であった。日本への移住を強いられた人々及びその子孫である「在日」は、かつての植民者であった国に住み、また南北朝鮮の分断という状況下で国家の虚構性を認識し、ディアスポラとして場所に対する複雑な感覚を有している。李正子の両親の世代である在日一世は、日本で異なる言語や風景に囲まれながら、満たされることの無いノスタルジアを抱え続ける。李正子はそのような父の姿を、風に飛ばされながらも辿り着いた地に根付く鳳仙花の種子に重ねることで、帰国をあきらめた絶望感と他国で生きる強さを同時に短歌に書きこんだ。二世である李は、一世である両親との間に生じる差異もしくは断絶の感情を詠む一方で、日本への帰属意識もまた希薄であり、むしろ帰属感そのものに対する批判を展開する。『マッパラムの丘』では、人々の運命を押し流す向かい風（マッパラム）に対する返し風としての短歌が、国家への帰属もしくは郷愁の持つ排他性を批判し、地球的な観点を導入する契機となっている。小谷氏の発表は「在日」という興味深いテーマを提示したにも関わらず、質疑応答では時間の都合上、カン氏とキム氏に対して1つずつ質問がなされたのみであった。今回のシンポでは意見交換や対話が重視されていたのは明らかであるにも関わらず、同様の状況が他のセッションにおいても見られた。この点については運営上の課題として指摘しておきたい。しかしながら本セッションは、「場所の感覚」というテーマにとどまらない幅広い問題提起の可能性が三氏から示されたことで、大変実りあるものだったと思われる。



『ASLE 日韓合同シンポジウム』

8月20日（月）

金沢市文化ホール

ASLE 日韓合同シンポジウム 2日目 セッション3 報告

藤村裕子（金沢大学・院）

シンポジウム2日目のセッション3では、高橋勤氏（九州大学）の司会で、「近代化と日韓の環境言説」をテーマに4名の発表と活発な質疑応答が行われた。まず、サイモン・C・エストック氏（^{スシキョクケン}成均館大学）が「ジェチルスチルベストール、『イヤー・オブ・ミート』、エコクリティシズム、そして国家（あるいは成長の限界）」と題して、非ステロイド性発情ホルモンであるジェチルスチルベストール（DES）を扱った、ルース・オゼキの『イヤー・オブ・ミート』を中心に、DESの影響を受けた人間及び肉牛の肉体のインオーセンティシティーやエコクリティシズムの今後の課題について示唆した。オゼキが疑問を投げかけたあらゆる意味での「限界」は、寛容に対する限界、虚と実の境界線に対する限界、そして「成長」についての限界であり、今回のシンポジウムの核心に触れる作品であるとエストック氏は捉えている。また、オゼキはエコクリティシズムとの関わりにおいては、牛や家禽が成長する限界をDESで乗り越えようとする試みを批判しつつ、拡大し続ける地球規模でのアメリカナイゼーションに立ち向かおうとしている。それは、アメリカの膨張主義とその成長を良しとするイデオロギーへの批判であり、そのアメリカを受け入れる日本への批判でもあるとエストック氏は分析して

いる。

次にアーシュラ・K・ハイザ氏（スタンフォード大学）がクロスカルチャーの観点から、「ロボットの楽園からテーマパークの楽園へ — 宮崎駿と高畑勲映画における環境主義、近代化、ポストモダン化」について、フィルム・クリップを交えながら発表した。ポストモダンに焦点を当てる高畑は、『平成狸合戦ぽんぽこ』で、シミュレーション、インオーセンティシティを強調している。作品に描かれるタヌキらの妖怪パレードは、都市開発に対するエコタージュであったが、ポストモダンのテーマパークに同化されてしまい、タヌキらは敗北を味わう。しかし、フォークロアのマジックをポストモダンが登用したということで、シミュレーションやインオーセンティシティはポストモダンに限らずもっと前の段階からあったと高畑は言っているのではないかと。近代初期を描く宮崎の作品では、主人公は自然と特別な関係にあるが、最後には自然と文化は別のものであり和解は難しく、また、どちらかを否定するのも難しいという結末を迎える。人間の介入を避ける自然の領域があり、人間あるいは文化と自然の調和は難しいと宮崎は言っているようである。最後にハイザ氏は、エコクリティシズムの観点からも、近代が生み出したメディア芸術を近代化のコンテキストの中で位置づける努力が必要であると強調している。



中村優子（立教大学・院）氏の「デカダンの描くファンタジーにおける自然と人間：坂口安吾の“桜の森の満開の下”と李箱の“黄牛と鬼”の比較を通して」では、ハイ・モダニズムの時代を代表する2人のファンタジー作品の中に描かれる自然観の比較による、日韓の近代化観の差について発表された。両作品ともロマン主義的自然観が見られるが、近代化を善と捉える李の作品にはキリスト教的自然観に基づく人間中心主義が表れている。一方、近代化を悪と捉える坂口の作品には近代批判とそれをベースとする自然賛美のロマン主義的自然観が通底している。また、日本を通して欧米を憧憬していた李と、敗

戦を経験した坂口とは、近代化への視点に差があり、日韓のモダニズムの旗手である両氏の自然観の差に投影されたと、中村氏は分析した。

最後に、寺下浩徳（立命館大学・院）氏による「二つの海・二人の女性—石牟礼道子『苦海浄土』と李男熙『海からの長い別れ』」では、水俣病事件（日本）と温三病事件（韓国）を扱った二つの作品と二人の女性作家の共通点及び相違点について論じられた。共通性は、両作品ともに公害が社会問題化した初期に書かれた先駆的な作品であり、女性表現者が女性を主人公に、社会問題を取り上げ社会批判を行った点にある。相違点は、女性性が同じように描かれているわけではない点、石牟礼がネイティブ、李がノンネイティブである点、擬人法を用い、人間中心的な環境概念に異議を唱える石牟礼と環境汚染に対して激しく異議を唱えるが、石牟礼ほど脱人間主義の思想にまでなっているか疑問である李との環境思想が同じでない点にある。これらの公害事件には、日本の企業や環境行政との関係性があることから、共通点と相違点を越えたポスト・コロニアリズムという視点からも改めて問い直す必要がある、と寺下氏は述べている。

セッション4「文学と環境の行方—東アジアからの提言」報告

平塚博子（敬和学園大学）

日韓合同シンポジウム2日目最後に行われた「文学と環境の行方—東アジアからの提言」と題されたセッション4においては、日韓4人のパネリストからの報告がなされた。パネリストの一人である結城氏はセッション全体のテーマの一つとして「近代というディスコースをいかに乗り越えるか」をあげたが、東アジア発の新たな環境言説の模索、深化に向けて、環境思想、文学、大衆文化など様々なジャンルから興味深い提言が出された。

「ディーパーエコロジー—東洋的思想様式の脱構築によるディープエコロジー運動の改定」と題された報告の中で、最初のパネリストであるリ・マンシク氏（景園大学校）は、人間とノンヒューマンが共存する持続可能な社会の実現に向けて、ディープエコロジーの思想に基本的に同意しつつも、そのナイーブさを指摘した。高度に産業化された社会において実現可能な環境思想、実践として氏が試みるのは、ディープエコロジー運動の脱構築、そして東洋思想の視点からの再解釈である。西洋の近代思想の基本である二元論からの脱却の手段として、デリダの理論を用いながら超越と包含という2つの

概念を組み合わせた包越という概念を、リ氏は提案する。この包越という視点にたち、十分に産業化されていながらも、生態学的に成功している緑の社会に向けたあらたなディープエコロジー運動、すなわちディーパーエコロジー運動の必要性を李氏は訴えた。



2 番目のパネリストの中垣恒太郎氏（常盤大学）は、1960～70 年代にかけての日本の大衆文化に目を向けた。「公害怪獣とエコクリテシズム—ポスト工業化社会における核・ジャンク・廃墟の想像力」というタイトルで中垣氏がおこなうのは、高度経済成長期の日本の大衆文化とドキュメンタリーをエコクリテシズムの見地から映像を交えながらの再検討である。中垣氏は『宇宙猿人ゴリ』などの少年向け子供番組に着目し、これらの子供向け大衆娯楽が子供達に科学の時代という未来へのビジョンを提供すると同時に、高度経済成長の背後で公害などのかたちで具体化する環境汚染への恐怖を現していたことを指摘した。さらに中垣氏は、同時代に発表された水俣問題についてのドキュメンタリーと子供向け大衆娯楽を比較しながら、テレビの中で繰り返し登場する公害怪獣たちが、ドキュメンタリー同様、経済発展の裏で

破壊されつつある環境という問題に対する警告として作用していたと論じた。

3 番目のパネリスト結城正美氏（金沢大学）は、「庶民の文化と新たな環境言説—森崎和江と石牟礼道子の言葉の母層」と題された発表の中で、日本の環境文学の特徴の一つとして「庶民の文化への関心」を指摘した。結城氏は「庶民の文化」を、日本の近代化に絡めとられなかった人々の生の営みやそれを支える価値観と定義する。そしてアプローチこそ違え、日本の代表的環境文学作家である石牟礼、森崎がともに庶民の世界を描写していること、さらに二人の作家が主婦の目線にたつことによって生命重視の価値体系に接近することが可能になっていると論じた。結城氏はこの「庶民の文化への関心」の中に、つながりを切った非・反生命的な近代というディスコースを乗り越える環境言説の深化の可能性を見出す。さらに「庶民の文化への着目」の強化が、土地の者（ネイティブ）/よそ者（ノンネイティブ）という二元論をこえて他者受容を促す環境言説の深化という点で、日本発の提言となりうると述べた。

最後のパネリストであるウ・チャンジェ氏（西江大学）は、「木と鳥のハーモニー—イ・チョンジュンのエコロジカルな想像力」というタイトルで、老荘思想、そして韓国現代文学の代表的作家イ・チョンジュン作品に流れるエコロジカルな思想についての報告を行なった。ウ氏によれば、世界を普遍的な客体として認識せず、いかなる中心的自我をも回避し、否定する老荘思想が目指す社会とは、存在の純粋な状態が維持されている社会であり自然の法則が万物に作用する社会であるという。こうした世界観はディープエコロジーの思想と共通するとウ氏は指摘した。さらに老荘思想におけるエコロジカルな視座が、イ・チョンジュンの様々な作品、その中でも特に、自然の法則あるいは「無為自然」に従って行動する鳥や木の描写のなかに読み取れると論じた。

4 人のパネリストからの報告に続いておこなわれた質疑応答のセッションにおいても各パネリストからの刺激的な提言に応えるかのように、活発な質問やコメントが出された。ここで出された課題には、「ディーパーエコロジーと環境正義はどのように結びつくのか」、「環境文学を深めていく上で庶民という言葉に加えてさらにボキャブラリーをつくってゆく必要があるのではないか」、さらに「庶民の文化を日本の特有のものとして見るだけでなく、階級という視点もくわえて考えてゆく必要があるのではないか」などがあった。これらの課題は、今回の東アジアからの提言がさらに豊かな環境言説となりうる可能性を参加者に感じさせてくれるものであった。

シンポジウム報告：セッション 5 ゲーリー・スナイダー in アジア

塩田弘（広島修道大学）

「ASLE 日韓合同シンポジウム/金沢シンポジウム」の「Session 5 ゲーリー・スナイダー in アジア」は、ゲーリー・スナイダー氏をコメンテーターに迎えてスナイダー作品を論じるという豪華なシンポジウムとなった。日本・韓国・台湾からの四名の発表者がスナイダー作品とアジアとの接点を中心に研究成果を発表し、発表を受ける形で三名のコメンテーターが独自の体験を踏まえてスナイダー作品の魅力に熱く語り、最後にスナイダー氏ご自身が、各発表に対するコメントと質疑応答を行う形でシンポジウムは進行した。

第一発表者、岩政伸治氏の『『無の場所』から読み解く賢治とスナイダー』では、開催地の石川県出身で金沢とゆかりの深い哲学者、西田幾多郎の思想を図式的に解説し、西田の思想を通じて宮澤賢治とスナイダーの思想と作品の解釈の可

能性を示した。岩政氏は「いま/ここ」にこだわるスナイダーの態度の背景に東洋的な思想を読み取り、そこからエコロジー思想へ展開したことを予稿集に示唆しているが、スナイダー氏が約 10 年にわたり仏教修行を行い思想形成の地となった日本からの発信は、今後ますます重要なものとなることだろう。

次に金原中氏(Kim Won-Chung)の「韓国におけるゲーリー・スナイダー研究」では、1970 年代に紹介され 1990 年代に本格的に始まった韓国でのスナイダー研究の歴史と最新の研究動向についての報告があった。これまでに韓国ではスナイダーの研究論文 35 点が出版され、博士論文が二点、修士論文が十点あり、翻訳は四冊(選詩集二冊、エッセイ集二冊)が出版されているとのことであり、日本同様に韓国でもスナイダー作品が広く受け入れられ、研究も盛んになっている様子が紹介された。このような研究の隆盛は今後も続くことが予見され、韓国での研究も今後は注目しなければいけないとの感想を得た。

続いての発表は、蔡振興氏(Robin Chen-Hsing Tsai)がスナイダー作品に通底するテーマに焦点を当てた「ゲーリー・スナイダーとエネルギーの文学」であり、仏教・東洋思想からフロイトにいたる古今東西の引用も多用しつつ、エコロジーに至る思想の核心について論じ、さらにはスナイダーの文学作品自体がもつエネルギーについて示唆をした。

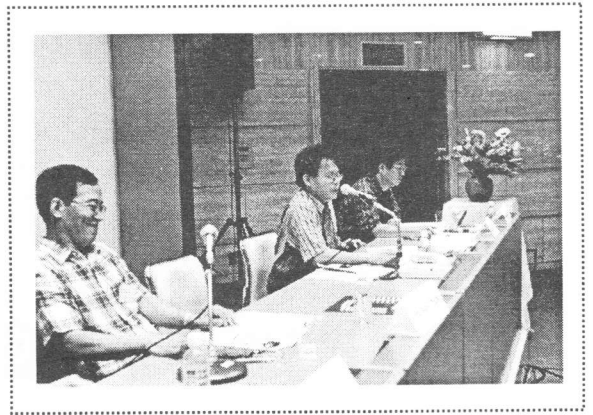
最後の発表者は、「惑星の未来を幻視するために—ゲーリー・スナイダーと日本、1951-2006」と題して、長年にわたるスナイダー氏との交流により今回のシンポジウムを可能にした山里勝己氏が、歴史的な視点からスナイダーを捉え直し、「ポスト・ヒューマニズムの文学」「惑星の思想」と表現し得る新しい人間像の可能性を示した。

このように、本シンポジウムでは日本や韓国に密着した独自の視点に始まり、「エネルギーの交換」というテーマから、「環太平洋」という巨視的な視点に至り、最後には文明論的にスナイダーをペリーのカウンターとして捉えるなど、それぞれの発表者の足場を出発点に壮大なテーマを歴史的に構築するものとなった。全体を通じて、スナイダーの作品と思想の重層性を示した画期的なシンポジウムであり、今シンポジウムの発表内容は、アジアから発信するスナイダー研究の今後の方向性を示唆するものとなるだろう。

研究発表後の各コメンテーターの発言は、文学研究以外からの様々な視点が印象的であった。管啓次郎氏はご自身の人類学者としての出発点がスナイダーの作品との出会いであったことを披露し、加藤幸子氏はスナイダーの選詩集『ノーネイチャー』の翻訳を始めた経緯と共訳者の金関寿夫氏の思い出、ならびにスナイダーの詩の翻訳をおこなう際に感じた素朴な疑問点を述べた。それは「スナイダーの詩を『女ことば』で訳したらどうだろうか?」というもので、それは自然について表現する際には女性の身体を意識する必要があるであろうという意図であった。また、スナイダーの詩を韓国語に翻訳した Lee Sangwha 氏もコメンテーターに加わり、スナイダーが初めて韓国を訪れた際のエピソードと、スナイダーの思想「すべての創造力の根源にある野生」について論じた。

最後にスナイダー氏が日本時代の数多の恩師を回顧した後、それぞれの発表者の発表内容に対してコメントしたが、これは最も理想的な形で作家と研究者との対話がなされた瞬間であった。この様子は 1955 年 8 月のフォークナーの「長野セミナー」のように、後の世代に語り継がれる歴史的なイベントとして記憶され、これからの日韓の交流をもとにした新たな文学環境研究の勢いに一段と弾みをつけるものであろう。

このようにバラエティーにあふれた「Session 5 ゲーリー・スナイダー in アジア」は、「ASLE 日韓合同シンポジウム/金沢シンポジウム」の成功を象徴する刺激的で密度の濃い、あっという間に過ぎた 3 時間であった。



ラウンドテーブル：さらなる連携を求めて

山里勝己 (琉球大学)

ラウンドテーブル「さらなる連携を求めて」では、日本側から生田省悟氏、野田研一氏、韓国側から Lee Soonwong 氏、Shin Moonso 氏が発言した。特に共通テーマを設定しないで、1 人 10 分、自由に発言していただきたいという発言が司会の生田氏からあり、討議が始まった。とは言っても、基調にあったのは、(1) これからの日・韓および近隣諸国との研究連携、(2) 次世代を担う大学院生の交流をどのように進めるかということであった。

生田氏は、まず、今回の共同シンポジウムの研究発表に見られる日韓の違いについて発言し、(1) 韓国側は自らの歴史を深く意識し、伝統を踏まえた研究発表が多かったが、日本側は日本の近・現代に関する発表が多かったこと、(2) このような日本側の発表の傾向は、発表者が英米文学研究者であったことにも原因があるのだろうが、なによりも 1945 年以

降の日本の歴史教育、すなわち伝統的な歴史を拒否していく指向が強く影響していたのではないかと指摘した。また、エコセントリズムのような概念が孕む矛盾にも言及し、研究を深化するためには厳密な言葉の検討が必要であること、そのような注意深い研究態度からわれわれは自らの言葉を獲得するのであり、そうすることで初めて世界の他の地域の研究者たちとの対話が可能であり、それが豊かな成果につながると指摘した。

Shin Moonsu 氏は、金沢の町並みがスナイダー氏の提唱する Old Ways を実践するようなものであり、まさにバイオリージョナリズムのモデルであるという感想を述べた。さらに、環境問題は人間の論理を越えた複雑な問題であり、解決の方法を見つけるためには相互の交流が必要であること、一国に限定されないグローバルな視野が必要であるから、韓日の交流がネットワークとして形成され、東アジアの自然観が東洋と西洋に共有されるようになることを期待したいと述べた。そして、カリキュラムやシラバスを共有することで、環境文学の発展に共同で貢献することができると指摘した。

野田研一氏は、1997年のハワイでの国際大会、2003年での沖縄大会、そして2007年の金沢大会は、長年の夢が着々と実現されてきたプロセスを示すものであり、この10年はASLE-Japanの方向を決定づけてきたすばらしい10年であったと指摘した。また、環境文学やネイチャーライティングは「売れない」分野であり、市場性という点ではころもとないが、しかし、このような分野の研究は高いところざしに支えられたものであり、そのところざしをささえるものは重要な仕事をしているという自負であると述べた。さらに、野田氏は、今後は(1)双方の、あるいはアジア諸国のネイチャーライティング・アンソロジーを編纂する仕事、(2)テーマを設定した共同研究、(3)そして次世代の研究者の養成を共同で行うことが必要であり、このような仕事が次の夢へと繋がると指摘した。

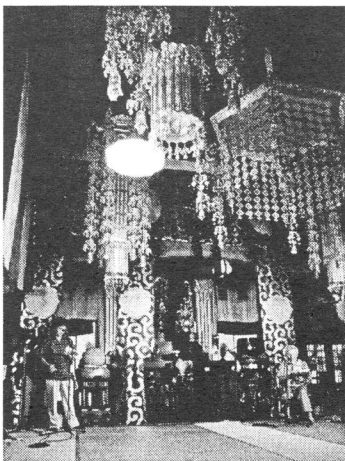
Lee Soonwong 氏は、1970年代から始まった韓国における環境汚染批判を紹介しつつ、このような批判も結局は人間中心主義に堕しているのではないかと率直な発言を行った。近代化、近代工業文明は単純に悪であろうか、自然と人間はほんとうに平等であるか、人間は自然の一部になり得るのか、じつはすべての生命体は自己中心的でDNAの命令にしたがっているだけではないのか、等々、氏は根源的な問いかけをおこなった。そして、このような生命体の「利己的な属性」を明晰に認識しながら、東アジアにおける環境運動・研究の連携は推進されるべきだと指摘した。

個々の発言のあとで、発言者間およびフロアとの質疑応答がおこなわれたが、紙幅の関係で割愛したい。全体として、今後のコラボレーションの豊かな夢と、そのような連携にともなう現実の厳しさを感じさせるラウンドテーブルであった。



ゲアリー・スナイダー氏&高銀氏 ポエトリー・リーディング in 大乘寺 Poetry Reading by Ko Un and Gary Snyder in Daijoj-i

高橋綾子（長岡高専）



参加者は金沢ニュー・グランドホテル前発のバスで、日没の迫る頃に金沢市長坂町に位置する曹洞宗大乘寺に到着した。蟬時雨の終わりとともに、鐘の音が響く頃から、ポエトリー・リーディングは始まった。生田代表より「大乘寺で詩の朗読会を行うという夢が実現した」という挨拶があり、引き続いて、住職の東隆眞老師からの説法が行われた。東住職は、大乘寺が典型的な禅宗七棟伽藍で、仏殿は国指定重文、他は県の指定有形文化財であり、北陸地域屈指の修行道場でもあることに触れた。禅の修行の場において、文化的な集まりが開かれたことへの喜び、そして、この朗読会を、「永平寺の道元禅師と、スナイダー氏の道元禅師が出会う場である」とお話になった。

スナイダー氏の朗読作品は以下の通りである。カリフォルニアの自然を禅の視点で描いた“Piute Creek”（「パイユート・クリーク」）（『割り石』）、1981年に市川猿之介の歌舞伎『黒塚』を見て、その鬼女伝説を下地とした“Old Woman Nature”（「自然老女」）（『斧の柄』）、1957年に京都相国寺で修行しているときに書いた“Kyoto: March”（「京都 三月」）（『割り石』）と、日本と禅に関わる詩から始まった。次は、禅とエコロジーを結びつけたスナイダー独自の世界を表

象した“Song of The Taste”（「味覚の歌」）（『波について』）と、“One Should Not Talk To a Skilled Hunter About What is Forbidden by the Buddha-Hsiang-yen”（漁師を前に仏陀の戒を説くべからず-香巖禪師）（『亀の島』）に関して、スナイダー氏は生態学についての見解を述べる。「私にとってエコロジーとは、単に自然を愛するとか環境主義だけでなく、科学の分岐した生態学であり、生命体、それらの相互の関係性や共同体を学ぶことであります。日本の生態学では、この点に多く触れており、共同体はエコロジーの分類である。エネルギーというものが、自然のシステムに流れています。これは、食物連鎖に現れています。これを少し単純化してみると、「どのようにお互いを食べ合っているのか」ということになります。「食べること」、これは、自然のプロセスにおける奇妙であり、残酷でもある美しい真実であります。私は日々の瞑想で「食べ物とは生命体にとって一体何なのか」と考えました。」と説明した。“Pine Tree Tops”（「松の梢」）（『亀の島』）、“Axe Handles”（「斧の柄」）（『斧の柄』、1970年代の石油危機に直面し、「経済発展を続けるために、化石燃料や原子力に依存することに未来があるか」というエネルギー問題を討論する会議に向かうとき、砂漠で出会ったカササギの歌を下地にした“Magpie’s Song”（「カササギの歌」）、“The Dead By the Side of the World”（「路傍の亡骸」）、“As For Poets”（「詩人といえば」）（『亀の島』）、“Earth Verse”（「地球の偈」）（『終わりなき山河』）、追加朗読詩として、最新詩集 *Danger on Peaks* (2004)（『絶頂の危うさ』 邦訳原成吉 2007年）より、日本に縁がある3編、“The Hie Shrine and the

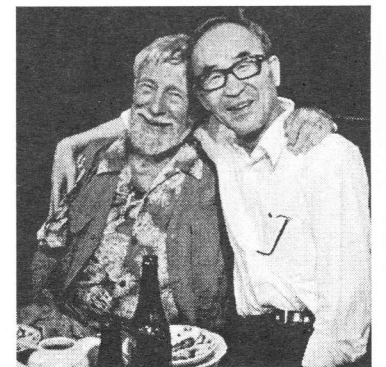
“One-Tree” District（「日枝神社と『一ツ木』界限」）、“The Great Bell of the Gion”（「祇園の鐘」）、“Senso-ji”（「浅草観音、浅草寺、隅田川」）を山里勝己琉球大学教授の対訳日本語で朗読した。スナイダー氏は、これら3編が、エッセーと短詩の組み合わせによって書かれている点に触れ、俳文に近い形式であることを述べている。スナイダー氏は、禅、エコロジー、俳文という日本との関係性のなかでこれまでに培われた詩を、禅の場を背景に、アメリカ現代詩の誇る詩を肉声で伝えるというパフォーマンスで披露した。

高銀氏は、朗読を前に、詩とは自然の声であり、今ここで詠うこと、今生きてこそ詩は生まれると語り始めた。高銀氏の朗読作品は以下の通りである。「今君に詩がきたのか」（『彼岸感性』）は、日本語で書いた詩を、今ここで韓国語に訳して朗読することを告げた。引き続き、忠誠心として革命を謡った「歌」、高銀氏が二十代半ばに書いた「詩人の心」（『彼岸の感性』）、「秋の星座」（『海辺の韻文集』）、「三四更」（『文義村に行つて』）、牢獄生活に書いた「ぞうきん」（『祖国の星』）、「通り過ぎながら」（『詩よ 飛んで行け』）、「流星」（『禅詩 何か』）、「酔っ払い」、「ふくろう」（『禅詩 何か』）、「ある喜び」（『まだ 行かない道』）、「窓辺で」（『ある記念碑』）、「その詩人」（『ある記念

碑』）、「休戦線」（『南と北』）、「雪のふる日」、「森に入つて」、「老子とは異なつて」、追加分として、「瞬間の花」より、「櫓を漕いでいたのだが」、「道のど真ん中」、「精神病院は華やかだ」、「下りる時には見えた」、「私の家の外にいっぱい」、「よくよく考えてみると」、「川と海を行き交い」、「謙虚さよ」、「もみじの横に」が金沢大学教授、鶴園裕氏による日本語対訳とともに朗読された。高銀氏の朗読は、豊かな感情表現とともに、その躍動的な言語を特徴とし、私たちは終始魅了された。「詩は流れである。この流れが時おり岸边にぶつかったり、闇と光とを受けて跳ねるとき、律動を作りだすこともあるだろう。それゆえ私の詩は響きである。」と書いている。高銀氏の詩は、執拗に、詩とは誰なのか、なぜ詩を書くのか、なぜ詩でなくてはならないのかと問いかける。この魂が詩語へと変換された臨場感こそが、朗読会の醍醐味であろう。

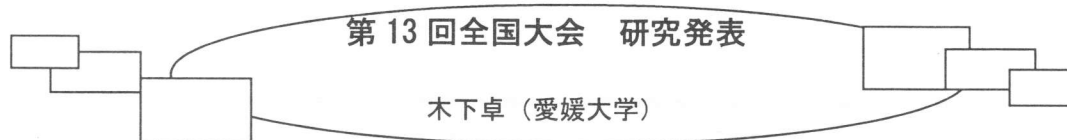
日韓合同シンポの特別協賛であり、大乘寺でのポエトリー・リーディングの発案者でもある日本ロレックス財団のブルース・ベイリー社長が最後に、「スナイダー氏と今朝“Imagination covers all.”という話をしたが、朗読会という想像力の世界を“memory”（思い出）としても心に宿らせてほしい」とご挨拶をされ、我々をさらに魅了した。

スナイダー氏の想像力は、太平洋を大きく包み込みながら、口承詩として生命の関係性を問うものであった。高銀氏の詩は、生きる証として、生とは何かと我々に問う。スナイダー氏の師匠でもある故金関寿夫先生は、音の詩を「魔法としての言葉」と述べられていたが、大乘寺という禅の場を共有しながら、二人の肉声と身振



りは見事に詩言語として現前したのである。これは、二人にとって詩が自然を代弁する言葉であるという信念を共有することによる。大乘寺朗読会は、太平洋を隔て激動の50年間を生きた二人の大詩人のポエジーの饗宴した場（サンガ）であり、太平洋文学の交流としても歴史的な朗読会であった。

日韓合同シンポジウムに先立って、8月19日午前、金沢市文化ホールにて第13回全国大会が開催された。大会の報告を、司会を担当した木下さんをお願いした。（編集部）



日韓合同シンポジウムと同時開催で行われた本大会では、村松直子氏（青山学院大学・博士後期課程）と高野忍氏（京都大学大学院・博士後期課程）による研究発表があった。

村松氏の「V. ウルフの東洋的自然観および世界観——短編『蛾の死』を中心に」と題した発表は、真昼に書斎のなかを飛び回って一日限りの命を精一杯燃焼する小さな生き物を「純粋であるが、きわめて薄い、この世の巨大な活力の繊維」が織り込まれている「純粋な数珠玉」とみなすウルフの自然観・世界観をヒンドゥー教と仏教のそれらに照合させながら、このモダニズムの作家と東洋思想との接点を浮き彫りにしようとするものであった。この発表に対して、オリエンタリズムやポストコロニアリズムとの関連性において考察すれば、さらに研究が深化するだろうという意見があった。

また、高野氏は「Notgeld から小切手へ——Thomas Pynchon の小説の代用通貨を通して考える、産業社会の持続可能性」と題した発表において、現代が直面する資源や環境問題と深くかかわる要素を先取りしていたこの作家の『重力の虹』と『ヴァインランド』に登場する二つの代用通貨（第一次世界大戦後のインフレ下のドイツのNotgeldと仏教的因果応報に基づく義理小切手）とは、科学的知識を背景にした西洋の産業社会の対極にあるものだとみなし、これらが現代産業社会の持続を可能にする方向性を示唆していることを考察した。Pynchon という難解な作家にじっくりと取り組んだ研究発表であった。

【報告】

第19回 エコクリティシズム研究会に参加して

三浦笙子（東京海洋大学）

今年度の研究会は横田由里先生のご尽力により、広島国際学院大学の立町キャンパスの開放的なガラス張りのビル内で8月11日に開かれた。いつもながら精力的な8時間のスケジュールで、各地から集まった参加者の興味深い研究発表が次々とこなされていった。

午前の部では藤江啓子先生（愛媛大学）の司会のもとに横山泰三氏（高野山大学大学院）による「環境倫理の問題について」と塩田弘先生（広島修道大学）の「ジャズとエコロジー——*Ecology of Everyday Life*を中心に」の研究発表が行われた。横山氏は専門分野であるロシア文学における伝統的自然観からレオポルドの環境倫理と西田幾多郎の哲学を引き合いに、エコクリティシズムは「破壊にさらされた自然・環境の存在を指摘するのみでなく、従来の伝統的な哲学・文学の再考を促し、新たな論点を打ち出すべきではないか」という問題提議にいたった。現在の環境文学批評では環境正義が勢いを増していると結論づけたローレンス・ビュエルの『環境批評の未来』を詠し終わった伊藤詔子先生他数名にとっては特に刺激的な提言であった。

塩田氏の発表は、サウンドスケープ（音が表現する風景）の一考察として、ジャズの即興性が人生とアナロジーをなしていることに注目した研究であった。ソーシャルエコロジーとエコフェミニズムに取り組む心理学者 Chaia Heller の代表作 *Ecology of Everyday Life* の環境思想が歌手で小澤征爾の甥でもある小沢健二の曲に与えた影響を探り、CDで小沢の曲を聴くという一興もあった。

午後の部ではまず、以下三冊の話題作について輪読報告と研究動向のグループ（各数名、敬称省略）による発表があった。

1. カレン・テイ・ヤマシタの『オレンジ回帰線』（司会）吉田美津、（発表者）中島由紀子、岸野英美、中垣恒太郎、横田由理、横山純子
2. ドン・デリーロの『ホワイト・ノイズ』（司会）大島由紀子、（発表者）伊藤詔子、藤江啓子、水野敦子、三浦笙子、辻祥子
3. ルース・オゼキの『オール・オーバー・クリエーション』（司会）松永京子、（発表者）浅井千晶、深井美智子、熊本早苗、城戸光世、真野剛

例年のことながら、単なるサマリーでなく、考察とリサーチをもとにした発表が出揃い、これからの研究に刺激と励みになることが期待される。

最後に島根大学の長岡真吾先生をお迎えし、「現代米国先住民のアイデンティティ——Sherman Alexie, *Indian*

『Killer における考察』という題名でご講演頂いた。長岡先生は司会役の横田由理先生とは多民族研究学会で一緒であり、日本でのシャーマン・アレクシー研究のパイオニアでおられる。暖かいお人柄を感じさせる語り方とパワーポイントによる明瞭なご講演の内容を要約すると、アレクシーが取り組む米国先住民のアイデンティティ形成の問題は、白人社会が作り上げた「虚構のインディアンのふりをする」ことによって問題回避することにある。アレクシーは『インディアン・キラー』のリアリティをフィクションの重層構造の内に置き、小説の枠外にも主人公が存在

する可能性を強調し、アメリカ社会に依然として打開不可能な先住民の白人社会への依存を明らかにする。先住民文学の深みと長岡先生の底知れぬ博識に感服したご講演であった。

私が参加しはじめて数年になるが、エコクリティシズム研究会は学会に近いといえるほど活発で、有意義な発見が多い。今回の発表内容でも明らかであるが、環境文学がいかに幅広く、発展の速い研究分野であるかを証明する会であることを実感した。

第46回日本アメリカ文学学会全国大会ワークショップⅡ 「ポスト・カーソンと環境正義の文学」

真野剛（広島大学・院）

2007年10月14日（日）、日本アメリカ文学学会（於：広島経済大学）にて、ASLE-Jの分科会であるエコクリティシズム研究会が、「ポスト・カーソンと環境正義の文学」と題してワークショップを行った。司会を担当された横田由理氏（広島国際学院大学）を始めとし、浅井千晶氏（千里金蘭大学）、中垣恒太郎氏（常盤大学）、松永京子氏（日本学術振興会特別研究員）の4名のASLE-J会員が、環境的人種差別を批判する“環境正義”をテーマとするエコクリティシズムの新たな段階を提示するとともに、その多様性と可能性への言及を行った。

最初の浅井氏の発表では、環境問題の実例とともに、レイチェル・カーソンを起点とした1人でも行動を起こす勇気を持った女性たち（＝レイチェルの娘たち）による環境運動を論じた。1970年代後半に起こった、運河への廃棄物・有害物質の投棄が引き起こしたラブキャナル事件へのマリー・ロイス・ギブスの行動。また、『沈黙の春』の寓話が現実のものとなったと言われる、テキサス州ウィノナで住民の公害病を引き起こした企業の放射線物質・有害産業廃棄物の処理に対して立ち向かったフェリス・グレイザーとそれを記したタミー・クロマー・キャンベルの『果樹園の実り：東テキサスにおける環境正義』（*Fruit of the Orchard: Environmental Justice in East Texas*, 2006）。そして、癌と環境との関係性を説き、現代の『沈黙の春』の1つと評価されるサンドラ・スタイングレイバーの『川下に生きて』（*Living Downstream: An Ecologist Looks at Cancer and the Environment*, 1997）である。浅井氏は、個人としての行動がやがては一定の成果をあげることとなった彼女たちの活躍を語るとともに、カーソンの系譜が脈々と引き継がれていると話し、環境正義を考える上での彼女たちの軌跡の重要性を述べた。

中垣氏は、ハリケーン災害が露呈させたアメリカの権威主義やメキシコ系移民に対する人種差別の問題について論じた。スパイク・リー監督による映画、『堤防が決壊したとき』（*When the Levees Broke*, 2006）は、2005年、ハリケーン「カトリーナ」が去った後のニューオーリンズでいかに復興計画が進められなかったのかを記録し、その主因を人口の7割がアフリカ系アメリカ人であったことと断定した。また、1900年に生じたハリケーン災害を描いた小説、エリック・ラーソンの『アイザックの嵐—1900年のハリケーン』（*Isaac's Storm*, 1999）では、災害情報を事前に察知していながらも、アメリカの中央集権体制によって黙殺されてしまったキューバ人の気象観測官の存在を顕にした。中垣氏は、この2つの自然災害を描いた作品を分析することで、過去・現在を問わず白人中心のアメリカ社会が蔓延していること、そして、それらが災害の規模を拡大化させているという“都市環境正義”の問題の本質を暴き出した。

松永氏の発表は、劣悪かつ過酷な労働環境や、科学物質によって死の危険に晒されたメキシコ系移民を描いた3名のチカーナ作家による作品を、環境正義の側面から考察したものであった。ヘレン・マリア・ヴィラモンテスの『イエスの足元』（*Under Feet of Jesus*, 1995）は移民労働者である13歳の少女エストレーラの、生きるために必死で抵抗する姿を描くとともに、イエスと同化させることで彼女を救世主として描き出す。また、チェリー・モラガの戯曲『英雄と聖人』（*Heroes and Saints*, 1989）では農薬汚染により被害を受けた女性と、その母体から生まれた子供たちの影響をテーマとし、それに対する少女セレジータの抵抗運動を描く。松永氏によれば、前者の作品はアクティヴィストとしての目覚めを描いているのに対し、後者では開花するアクティヴィストの活躍を描いているものである。また、アナ・カスティヨの『神から遠く離れて』（*So Far From God*, 1993）でも同様に、工場での薬品によるチカーナ労働者の身体への影響を、環境的不公正の結果として描き出すのである。

最後に、司会としてワークショップを統べられた横田氏は、アメリカの産業開発によって引き起こされた環境破壊をネイティブ・アメリカン作家の視点から取り上げた。まず、①報酬や経済効果を引き換えに行われるネイティブ・アメリカ

ンの土地への環境汚染誘発施設の誘致、②土地を「母なる大地」と考えるネイティブ・アメリカンの自然観と“commodity”と考える西欧資本主義との相違、この2点を導入への前提として確認した。ネイティブ・アメリカン作家のサイモン・J・オルティスやレスリー・M・シルコーは、合衆国政府が危険性や人体被害を隠匿した上で、核開発のために行われたウランウム採掘を先住民に行わせていた事実を抗議した。周知のように、シルコーの『儀式』(Ceremony, 1977)では、先住民の犠牲を第二次世界大戦で起こった原爆による日本での惨劇と重ね合わせる。また、リンダ・ホーガンの『ソーラー・ストーム』(Solar Storm, 1995)はダム開発による環境破壊を背景にしながら、5世代に渡る女性たちの活動を描く。横田氏は、白人男性中産階級が主体の従来の環境運動に対して、マイノリティの女性たちを主体とする環境運動を、“new environmentalism”と呼ばれる新しい環境運動の特色を示すものであると述べ、人種・国籍を越えた多文化的連合による相互理解や協力がいまや不可欠であると結論付けた。

本ワークショップは、女性、アフリカ系アメリカ人、メキシコ系移民、ネイティブ・アメリカンと立場は異なりながらも、「環境的人種差別の被害者」として共通項を持つ人々の現実的な様相を見事に論じた発表であった。質疑応答でのフロアの反応は、自然賛美から新たな段階へと入ったエコクリティシズム研究の動向への関心の高さを物語っていたと言える。今回は時間の関係上、作品を紹介するような形式での発表が主となったが、今後、研究論文としてどのように発展していくのか期待が持たれる。この新たな局面が、アメリカ文学批評におけるエコクリティシズム研究を活性化させるとともに、現代問題を考える上で新たな一石を投じることとなればと願うばかりである。

さる6月12日より19日の間、サウスキャロライナ州スパータンバーグで第7回ASLE-US大会が開催された。日本から参加された方々の中から4名の方に、それぞれ、大会の印象について報告いただいた。(編集部)

ASLE大会をとりまく小さな町

波戸岡景太 (明治大学)

ASLE-USの全国大会が開催されたサウスキャロライナ州スパータンバーグは、かつて紡績で栄えた町だという。けれども時は流れ、町の中心部は空洞化しメインストリートから活気は失われていった。ダウNTOWNでほとんど唯一の古本屋も、この7月には閉店となるらしい。訳をきけば、「カネだよ」とそっけない。もちろん、ハイウェイを30分も南に走れば、巨大なバーンズ&ノーブルで最新刊を買うことができるし、西の端にはブランド店のそろったモール、東の端にはホームデポや(これはそこら中にあったけれど)ウォルマートが待ち構えている。恒例のエクスカッションには参加しなかった私だが、地元のバスに揺られながら見たこの町には、典型的なアメリカ郊外型社会の風景が広がっていた。

会場となったウォーフォードカレッジは、ダウNTOWNから10分ほど歩いたところにある。そこからもうすこし先へ大きなカーブをまがると総合病院があるのだが、数マイルもないその距離をはさんで、町にはたしかな棲み分けが存在していた。2日目の午前、「新しい視点で読むソロー」と題されたセッションに参加した私は、30人前後の教室で、ソローとカーソンとピンチョンの関係について発表をした。つづく発表はソローをゴシックとして読んだり、自然ガイドとして読んだりするもので、最後の発表ではソローと月の関係が論じられていた。質疑応答があり、セッションが終わったあともひとしきり、フロアとの意見交換が行われた。

会場を出ると、突然の雨に襲われた。大会期間中、とかく天候は不安定だった。地元出身のタクシー運転手が、とにかく変な天気さ、と笑っていたのを思い出す。かんかん照りだった3日目のお昼、閉店間近のあの古本屋を訪れた私は、ここサウスキャロライナとは関係のない、西部の自然と環境をめぐる書籍を見つけた。「この本屋がなくなるのは残念だわ」とか「あまった本はどうするのさ」といった常連客に、「まだ何も決めてないよ」とレジのコンピューターでソリティアをしながら答える主人。手にした本をカウンターにそっと置くと、タイトルを一瞥して「あそこでやってる学会の人だね?」と笑った。私も笑って、そうだと答えた。そのときふと、店頭にあったこの町の歴史書(これは新刊)を買っていかうか迷ったが、主人と私のあいだに浮かんだ奇妙な笑顔をそのままに、私はお金を払って店を出た。そして今、あの古本屋はもうないのかと思うと、気持ちがなぜかしんとする。ASLE大会をとりまく小さな町は、いまもかたちを変えているのだろう。

Narrative Criticismのワークショップに参加して

浅井千晶 (千里金蘭大学)

2007年6月12日—16日にサウス・キャロライナ州のWofford大学で開催されたASLE-US大会に初めて参加した。伊藤詔子先生、岩政伸治先生と同じセッション“Rachel Carson: Influences and New Perspectives”で発表の場を頂いたからで、興味深い講演やセッションがいくつもあったが、ここではサウス・キャロライナの地勢を生かし、印象に残った

Pre-Conference Workshop の一つ、“Narrative Criticism” の報告をしたい。

John Elder が主導したこのワークショップは、Wofford 大の John Lane の協力を得て、Creek のほとりにある Glendale で行われた。参加者は Leslie Marmon Silko のエッセイ “Landscape, History and the Pueblo Imagination” を予め読んでおくことになっており、私たちの注意はおのずと場所と歴史の関係に向いていた。サウス・キャロライナ出身の詩人・作家である John Lane によると、Glendale はネイティブ・アメリカンが西部に移住する前に何千年も暮らしていた場所で、今も痕跡が残っているらしい。クリークの浅い水底に一匹の死んだ魚が沈み、渦潮のような泡が湧き出ているのが興味を引いた。古い製作所を見学した後、滝を背に輪になって座り、自己紹介をして、ワークショップは始まった。

最初に Mary Oliver の “Three Prose Poems” を音読する。参加者が気づいたことを発言し、Elder がコメントし、触発された他の参加者がさらに意見を述べる中、参加者の間に場を共有している意識が生まれてきた。Narrative Criticism は対象の評価・鑑賞と各人の物語が融合したものであり、“Journal” という文学形態は利点があると Elder が述べた後、実作してみることに。脳裏に浮かぶ詩の一部を用い、過去の経験や記憶、この場と風景に触発された思いや感情も含めて 2~3 段落の短いエッセイを書くように指示され、各人が好みの場所に移動し、自身の記憶や知識とその場での感覚を結んで創作した。最後に参加者の 2 人がエッセイを読み、体験を振り返った。

五感を研ぎ澄まし、関心を同じくする参加者と意見交換をすることで新たな発見をし、みずからエッセイを書くことでその場と一体になる——そのような実りあるワークショップだった。

ASLE-US 大会報告（サウスカロライナ州、ウォフォード大学／2007年6月12日-16日）

松永京子（学術振興会特別研究員）

サウスカロライナ州のウォフォード大学で開催された ASLE-US 大会に参加した。今回の大会のテーマは「合流：文学・芸術・批評・科学・アクティビズム・政治」。全米、海外から約 500 人がウォフォードのキャンパスに「合流」し、様々な分野の研究発表や講演が行われた。本報告では、特に「環境正義」をテーマにしたものを中心に、印象に残った発表や講演のいくつかを紹介したい。

学会の初日に「環境正義から環境的アイデンティティを考える」というテーマでワークショップが行われた。申込はしていなかったが、まとめ役の Rob Figueroa 氏 (Colgate University) に頼んで、聴講させていただけることになった。8名の参加者が、大会前に交換していたそれぞれの原稿をもとに、階級問題、ドキュメンタリー映像、教育法など多方面から環境正義についてディスカッションを行った。

この時の Figueroa 氏の教育現場からの声が印象深い。「エコクリティシズムを勉強しているものにはなぜか白人が多い。だからあえて、私の環境正義のクラスでは、エコクリティシズムを研究する白人生徒と、社会学で人種差別や社会正義を研究するマイノリティの生徒たちの合同授業という形をとった。しかし、社会学の生徒の中には、自分たちはもうすでにたくさん問題を抱えているので環境正義の問題にまで手がまわらない、他に余裕のある人たちが環境正義をやればよいと言う意見もあった。」環境正義研究が誰のためのものなのか、改めて考えさせられるワークショップだった。

2日目に松永が発表者として参加したセッションでは、Sandra Steingraber と Audre Lorde の癌作品を環境正義の視点から分析し、自身の乳癌の経験を大学の授業に取り入れることの意義を考察した Heidi J. Hutner 氏 (SUNY-Stony Brook) の発表が興味深かった。オーディエンスの多くが癌を身近な問題として捉えており、質疑応答では癌を経験した家族についての個人的な体験も聞かれた。また、授業に個人的な癌体験を持ち込むことの是非も問われた。「ナラティブ・スカラーシップ」の用法は、本大会でも大学の授業でも好意的に受けとめられているようで、環境正義研究における一つの方法論としてその有効性をみた気がする。

「身体的环境正義」をテーマにしたセッションでは、Sarah Jaquette 氏 (University of Oregon) が、山登りなど環境に関わるスポーツ文化やアメリカの環境主義において、身体障害 (physical disability) をもった人々がしばしば見過ごされていることについて発表。質疑応答では、カヌーに関して言えば足が不自由な人々が多く参加しているし、スポーツ文化が必ずしも身体障害をもつ人にとって否定的なものではないのではないか、という指摘がなされた。その他のセッションでも、大学のカリキュラムの一環として環境正義を取り入れている Greta Gaard 氏 (University of Wisconsin-River Falls) の発表、アイヌの作家・教育者・アクティヴィストでもある萱野茂氏の活動やスピーチにみる「チャランケ」の効用についての茅野佳子氏の発表など、多くの有益な発表があった。

本大会の目玉の一つは、環境正義研究の第一人者である Robert D. Bullard 氏 (Clark Atlanta University) による基調講演 “Wrong Complexion for Protection: Environment, Disaster, and Race After Hurricane Katrina” である。Bullard 氏は、2005年8月にアメリカ南西部を襲ったハリケーン・カトリーナを取り上げ、人種と階級の政治性を孕んだ環境的人種差別の問題について語った。特に印象に残ってい



るのは、人種によって車をもつ割合が異なるという Bullard 氏の指摘。災害のためその場所を逃れようとしても、手段がないためにそこにとどまる人々も大勢いたという。

環境正義研究の多様性を感じるとともに、これからの議論の豊かさを垣間みた数日間だった。

第七回 ASLE-US 大会報告 (June 12-16 in Spartanburg, South Carolina)

茅野佳子 (明星大学)

サウスカロライナ州で開催された第7回 ASLE-US 大会の会場となったのは、南北戦争以前に創設された私立大学 Wofford College で、古い南部のたたずまいを残すキャンパスには南部の初夏の風物詩であるマグノリアの白い大輪が甘い香りを漂わせていた。都合により後半のみの参加だったので、その中から三つのパネル発表と全体会、フィールド・セッションと大会後のフィールド・トリップについて報告したいと思う。

まず、大会3日目の早朝に行われたパネル発表 “What to Make of a Diminished Thing: Haiku and Nature Writing” では、ネイチャー・ライティングとしての俳句をテーマに、4人の発表者がそれぞれの視点から「俳句的瞬間 (haiku moments)」の特徴や効果を論じた。まず David Barnhill (“Moments, Seasons, and Mysticism: The Complexities of Time in Japanese Haiku”) が、俳句を「時間の詩」と定義し、アメリカの多くの自然詩が特定の「場所」に焦点を当てているのに対し、俳句は観察者とその対象、過去と現在といった二項対立を超えた特別な一瞬 (a haiku moment) の体験を描いていると考察した。次いで Ian Marshall (“Haiku Henry and the Old Pond: Or, the Wabi/Sabi of Walden”) は、Walden の中に見つかる多くの「俳句的瞬間」を論じ、Shawn Riling (“Haiku Echoes: Creating Meaning with Repetition”) は、限られた語数の中でよく使われる「繰り返し」の効果を物理的・心理的両側面から例を挙げて検証した。最後に、自らも多くの俳句を書き、2004年に発表タイトル “The Healing Spirit of Haiku” と同名の書簡集 (多くの俳句を含む) を出版した医学博士 David Rosen が、自分自身の俳句をめぐる体験を交えながら、精神医学の視点から俳句のもたらす「癒し」の効果を語った。

同日の午前中に行われたパネル発表 “Environmental Justice” では、環境的公正を扱った文学、教育現場での実践、そしてアイヌ民族の環境と人権をめぐる闘いについての発表があった。Janet Fiskio (“Epistemology and Voice in Environmental Justice Literature”) は、Zora Neale Hurston、Leslie Marmon Silko、Simon Ortiz といった作家が、作品の中で実験的な試みをしながら、共同体の声や体験を通してその地域の知識 (local knowledge) が形成される様子や、それが環境的不公正に抵抗し社会変革を起こすために不可欠であることを伝えようとしていることを理論的に検証した。Lisa Udel (“Native Women Writing/Righting History”) は、特にアメリカ南東部の先住民の運動と女性作家に焦点を当て、西欧中心の歴史の歪みが書き直されていく様子を論じた。Greta Gaard (“Teaching the Literature of Environmental Justice”) は、実際のシラバスと実践例を具体的に紹介し、その効果や問題点にも触れながら、サービス・ラーニングや活動家とのコミュニケーション、地元の小学校でのプレゼンテーション等の活動を通して従来の文学研究を現実の問題と結びつける方法を提示した。茅野佳子 (“Survival of Indigenous Culture and Environmental Justice: Power of ‘Charanke’ by an Ainu Writer/Activist/Educator”) は、アイヌ民族の苦難の歴史を紹介した後、アイヌ初の国会議員となった萱野茂の多岐にわたる文化活動と国会演説に焦点を当て、伝統文化の維持と環境・人権の問題が深く関わっていることを論じた。(このアイヌ民族に関する発表は修正版が2007年夏号の *The Green Horizon Quarterly* に掲載されている。)

大会4日目の午後に行われたパネル発表 “Contemporary Environmental Justice Fiction” では、4人の発表者がそれぞれアメリカ先住民作家、日系アメリカ人作家、アフリカ系アメリカ人作家、カリブ海の作家の最近の作品を取り上げ、マイノリティや先住民が共通に抱える問題を浮き彫りにし、環境的公正をめざす社会変革がこうした人々の横の連携によって闘われていくことを実感させるもので、非常に示唆に富んだ発表だった。また、全体会の中で特に印象的だった “The Aftermath of Hurricane Katrina” では、クラーク・アトランタ大学の環境リソース・センターの代表で、環境レイシズムの研究と運動において指導的役割を果たしている Robert Bullard が、2005年のハリケーン・カトリーナの被害が露呈した問題を、映像を交えて生々しく語った。ちなみにこの問題は、6月末にアトランタで開かれたアメリカ初の社会フォーラムでも大きく取り上げられ、Bullard が中心となって環境レイシズム訴える記者会見を開いている。(社会フォーラムに関する詳細は、「マルチチュード」を特集した12月末刊行予定の『接続2007』を参照されたい。)

3日目午後のフィールド・セッションは “The Regenesi Project” に参加し、地元のアフリカ系住民の多いコミュニティで実際に起きた環境汚染と取り組みについて活動家の話を聞き、現場を見学した。今回初めて参加した大会終了後のフィールド・トリップでは、サウスカロライナ州沿岸のセント・ヘレナ島とその周辺を訪れたが、アフリカ文化の伝統を維持し独自の文化を築いた Gullah の歴史や文化について学ぶ機会が思ったより少なく、参加者から不満の声があがった。物足りなさの残る旅となったが、これまで訪れたことのない「南部」を体験することができ、参加者

と交流できたのはよかった。

現代ネイチャーライターの横顔 (8)
 隠されたテネシー
 辻和彦 (福井大学)

それは異世界の太陽だった。

2005年9月のある日の午後、僕はベッドの上でだらしなく横になりながら、窓から差し込む、その異質な太陽のからりとした眩しい光を、ぼんやり見ていた。

事態は悪くなる一方のようだった。退屈紛れにつけてみたテレビに、泥の中に完全に水没したニューオーリンズの街並みが映っていた。“HELP ME”と赤く書いたシーツを窓から振り回す老人達。もしも、もう何日か予定を早く組んでいたら、僕はあの映像の中にまさしくいたはずだった。

異国の洗剤の匂いがするシーツに寝そべったまま、窓の外を仰いだ。メンフィスの空は、どこまでも澄み切った青が広がり、テレビの中の阿鼻叫喚の世界とあまりにもかけ離れていた。

日本学術振興会の科学研究費補助金の支援を受け、ニューオーリンズに向かうはずだった僕を待ち受けていたのは、デトロイト国際空港の入国管理官のクールな言葉だった。「行く、行かないは君の自由だ。でも今あそこを襲っているのは、最大級のハリケーンだよ。」しかし彼の言葉に反し、ニューオーリンズに向かうか向わないかは既に僕の自由ではなかった。乗り継ぎ地点のメンフィスに降り立つと、ニューオーリンズ行きの飛行機は「天候のため」運航休止だった。

こうして僕は本来単に通り過ぎるだけだったはずのメンフィスに、不本意にも数日滞在することになった。「南部の入り口」であるこの都市に足止めをくっているのはもちろん僕だけではなく、ホテルのロビーにも街の通りにも、困惑顔の観光客、ビジネスマン、そして南からの避難民達がうろついていた。

到着した翌日には、もうニューオーリンズに到着することは不可能であることが分かったが（その時はかの街に永遠に再建の日は訪れないかのように思えた）、次の目的地であるニューヨークに直接向うために、新たに飛行機を予約する金はなかった。時間はかかってもよいから、安価にここを脱出する方法を考えねばならなかった。

それにしても何という数日だったろう！ 午後のビール・ストリートに流れるギターの音色ともものうげな時間。裏通りで歌うように誘い言葉をささやくドラッグ売人。不法難民でないか確認するため、ホテルの部屋にやって来た捜査官の差し出すFBIバッジ。韓国人の彼女がつかないことを嘆く、街で出会ったただ一人の若き同胞。時間をつぶすために訪れたロックンソウル博物館や国立公民権運動博物館の不思議な充実ぶり。強い日差しと、建物の昏い影。ビルに木霊する老いた清掃夫の柔らかな歌声。脂っこいが「箸がとまらない」南部料理。そして夕刻の赤く染まったミシシッピ河。

セントルイス経由でニューヨークまでのグレイハウンドを予約し、ようやくメンフィスを離れた僕は、ずっと窓越しの風景を眺め続けた。ミシシッピ河を超え、メンフィス郊外を走り、幾多の農場、牧場、草原、森を通り過ぎ、バスはテネシーを抜けた。アメリカの中心部から東海岸への長い旅。ようやくバスを降り、マンハッタンの中を歩きながら、僕はずっとメンフィスの風景を想い続けた。ブルーズ・ギターの音色、広がるトウモロコシ畑、悠々と流れる大河、そしてあの異世界の太陽を。

Hidden Tennessee. 帰国してから、題名に惹かれて一冊の本を買った。筆者の Marty Olmstead はユリシーズ出版のHiddenシリーズに携わっているフリーランス作家であり、もともとは南部出身でありながら、現在は西海岸を中心に活躍しているようだ。実に細かく親切に、テネシー名所の風景、宿泊、食事情報が書いてある。旅行ガイド？ まさにそのとおりだ。

だがこの本は、誰が内容の最終責任を負っているのかよく分からないような、署名がない記事などとは異なり、一人の筆者が一貫して自分のスタンスで書いているので、その意味で十分「文学」なのだ。例えばグレート・スモーキー・マウンテンズ国立公園を紹介する4章では、彼女がどれだけこの地を歩き、愛しているかが伝わってくる。Author Favoriteは少し控えめでかえって好感がもてるし、合間に挟まれる“Black Bears”のようなエッセイからは、やはり彼女の人物のようなものが感じられる。もちろんだからといって、この本を偉大な文学作品であるとか、筆者が傑出した「現代のネイチャーライター」であると褒め称えられるわけにはいかないだろう。だが現代社会において日頃、無限に広がるブログの海に馴染み過ぎ、逆にかえって「確立された正典作家」像に当惑してしまう僕のような人間にとって、この本は、その「近さ」ゆえに幾つかのヒントを与えてくれる。圧倒的な権威でもって読者に「与えられる」文学は、果たしてかつてと同様、現代でも有効なのだろうか？ M・フーコーの古典的な「作者とは何か？」という問いを再提出するまでもなく、

むしろ作者も読者も並立して存在し、時にはそれらが混在してしまうような「文学」こそ、このネット社会において親しまれるものではないのか？ 少なくともこの本を読んでいる間、僕はあのグレイハウンドから見たメンフィス郊外の景色を再び楽しみ、カオスそのものだったあの日々と強烈な太陽を思い出すことができる。どんな古典小説も成しえない体験だ。

新聞に旅行談を書き続け、やがて大作家になったのは、マーク・トウェインだった。その意味でも、単なる「ガイドブック」だからこそ、そこには何か新しいものが生まれてくる要素がいつもあるように思われる。少なくとも、旅する際にいつも Lonely Planet だけでは、それこそ淋しいではないか。ことさら Hidden シリーズに拘るつもりはないが、ガイドブックを文学として読むという楽しさそのものは、積極的に認めるべきだと思うのだ。この次、メンフィスを再訪する際（どこかがまた補助金をくれればよいのだが）のために、僕はこの本を超えるような興味深い「ガイドブック文学」を漁っている最中だ。

*****[ASLE-J-Grad 報告]*****

今回の院生組織便りは、すこし趣向を変えて韓国からのご報告です。今夏、金沢シンポジウムのために協同研究を進めてきた成均館大学の院生、康連垣さんに執筆していただきました。約半年におよぶコラボレーションの過程をお伝えできると幸いです。

	自然をめぐる対話 Kang Yeonhaun
--	------------------------

これまで私は、自然についてあまり深く考えてきたとは言えません。この競争社会でやっていくには、「木を守れ！」というような自然保護運動をするより、重要なことがたくさんあるように思えたからです。しかし、金沢での日韓合同シンポジウムの準備をしているうちに、私を取りまくものが変わっていくように感じました。今回のシンポは、自然を見つめる眼差しを変えただけでなく、韓国と日本の関係をめぐる考え方も変えました。

今年の6月中旬、晴れた土曜日。リーダーとして段取りや連絡役を引き受けてくれている森田系太郎さんが、日本からソウルを訪ねて来ました。空港で彼を迎えたとき、その流暢な英語におどろいたのを覚えています。また、系太郎は韓国の環境文学についても、とてもよく勉強していました。彼の訪問はよい刺激になりました。李康仙(Lee Kangsun)と李暎顯(Lee Younghyun)、そして私の3人は、日本の環境文学を十分に理解しておく必要があると改めて思ったのです。

本番まではあつという間でした。シンポジウム当日はすっきりと晴れた日で、私たち6人はついに一堂に会することができました。系太郎が中村優子さんと山本洋平さん、そして司会を引き受けてくださることになったブルース・アレン先生を紹介してくれました。そのときのアレン先生の言葉がとても印象に残っています。

「私たちはお互いの国の文学に関して、その道の専門家というよりアマチュアです。ですから肩の力をぬいて、楽しみましょう。」

この先生の言葉は私たちの緊張をやわらげてくれました。

私たちの成果は予稿集と本番で披露したとおりですので、ここでは繰り返しません。ここでお伝えしたいのは、環境文学をめぐる対話から何を学んだかということです。まず、韓国と日本のネイチャーライティングには数多くの類似点があるということ。両国の作家たちは、どのような文学上の手法を用いているにせよ、各人各様、人間と自然との関係に意識的であるということ。また、環境文学研究は人間中心的なものの考え方を変更させ、自然と人間との関係を再考させる契機となるということ。これらの点は私にとって大きな発見でした。

.....

今、パソコンの前でこのエッセイを書きながら、金沢シンポの思い出が去来しています。考えをまとめようとしても、言語の限界があって、本当に伝えたいことが言葉にならず、もどかしい気持ちでいます。ただ確かに言えることは、ここまでの長い道のりで良い友をもつことができたということです。系太郎、優子、洋平の3人とこの仕事をやり遂げられたのは、この上ない喜びでした。今回のワークショップで、自然をめぐる対話をつうじて、国境を越えて共通するものがある、という認識を深めていったのだと思います。

いつの日か再び、両国の橋渡し役を担うことができればと祈りつつ、筆を置きます。ミナサン、アリガトー・ゴザイマシタ！

(訳・山本 洋平)

書評 上岡克己ほか編著『レイチェル・カーソン』（ミネルヴァ書房、2007）
高橋 勤（九州大学）

2007年はレイチェル・カーソンの生誕百年にあたる。それを記念して出版された本書は、作家の高田宏氏をはじめ、文学・環境学会、カーソン協会、さらにはネイチャーゲーム協会の会員など、多彩な12名の執筆者から寄せられた、カーソンへのオマージュである。

本書の構成は4つの章からなり、第一章「レイチェル・カーソン—人・思想・評価」、2章「海の3部作」、3章『沈黙の春』、4章「未来へのメッセージ」と、一般の読者を対象とした解説書の体裁をとりつつ、カーソンの作品をテーマ別に論じた論集である。

この章立ては、ある意味では非常に示唆的であった。なぜなら、それはカーソンの作品をテーマ別に分類しただけではなく、カーソンの美学性、政治性、博物学的関心、あるいは教育的側面を見事に浮かび上がらせる構図であったからである。いやむしろ、カーソンの作品に限らず、アメリカン・ネイチャーライティングと呼ばれる作品群の審美的、政治的、博物学的、教育的側面を巧みに切り取り、カーソンという一つのアイコンを通して浮かび上がらせようとした試みであった、と言える。作家の高田宏氏は、『センス・オブ・ワンダー』のなかに描かれたカーソンと姪の子ロジャーとの関係に、自らの作品のテーマのひとつである「内なる子供」の探求を重ね合わせられる。上遠恵子氏はライフワークであるカーソンの生涯と作品についての的確かつ丁寧な解説を施され、上岡克己氏はカーソンの受容史を含めた「全体像」を示される。三浦笙子氏は「海の3部作」の展開を探りながら海の「永遠さ」というテーマの虚実のポイントを置かれ、さらに、伊藤詔子氏は『沈黙の春』をめぐるアメリカ的、あるいはヨーロッパ的なレトリックの分析に焦点を当てながらカーソンの間テクスト性を論じられる。この他にも、文学・環境学会から、浅井千晶氏、吉田美津氏、岩政伸治氏らの、優れた論考が寄せられている。

ネイチャーゲーム協会から執筆された服部道夫氏の寄稿は、カーソンが母親と楽しんだ『自然学習の手引き』の時代的な背景を辿りながら、日本におけるネイチャーゲーム協会の設立の経緯と、子供と自然体験を共有する楽しさをみずからの経験をもとに語られている。

2007年には野田研一氏による『自然を感じるころ：ネイチャーライティング入門』（ちくまプリマー新書）も上梓されている。もし、学生に「ネイチャーライティングとは何か」と問われれば、私は迷わず野田氏の著書とともに、本書『レイチェル・カーソン』を読むよう勧めよう。なぜなら、この2つの図書は、ネイチャーライティングのやさしさと美しさ、その奥行きと過激さを同時に教えてくれるテキストだからである。

野田研一著『自然を感じるころ：ネイチャーライティング入門』（筑摩書房、2007年）
田畑伊織（自然教育研究センター）

先日、秋盛りの丹沢山塊を縦走した。平日でひっそりとした尾根道では、罅雲の下、眼下に広がる京浜地区から相模湾、伊豆の島々、富士山、南アルプスと広がる一大パノラマを独り占めに。ハイライトは鮮やかに色づいたブナ林での、大きな1頭の雄ジカとの突然の出会い。その気迫と存在感に圧倒された。地響きを立ててシカが走り去ると、先ほど強烈に意識した雄ジカとの対峙の時間がまるで夢の中でできごとのように思えた。静かな山道をたどりながら、改めて前夜山小屋の寝床で読み直した本書のことを反芻した。本書に触れることで、個人的には文学的な事柄のみならず、上記のような自分自身の体験を改めて考える上での、新しい視点を与えてもらった。

「ネイチャーライティング入門」という副題のついた本書は、「ちくまプリマー文書」というシリーズの一巻で、若い世代（中高生か？）に向けて出版されているシリーズだそう。文学が専門ではない僕のような者にとってはまことに喜ばしい出版物である。しかし、本書の内容はその読みやすさ、本の薄さや小ささに比例してはいない。文学者の立場から、ネイチャーライティングの紹介に留まらず、自然現象に対して主観的に反応する文学や芸術においての、近代から現代にかけての人と自然のかかわりをひも解き、現代の文化の中でのそれらの意義や課題について展開されている。メインタイトルが「自然を感じるころ」とされている所以であろう。

大きく3部構成をとっている本書の最初の章は「なぜ自然を見るのか？—〈交感の思考〉」と題され、本書のキーワードとなる「交感の思考」と、ヨーロッパ近代を通して、自然を「風景」という美的な喜びとして感じるようになったとされる感性についての紹介がなされている。小説や図像のみならず、著者自身の若い頃の体験、はたまた校歌や演歌、星占い等を例にした解説は、その文章の語り口からしても、まるで大学の一般向け講座を聴講しているようで楽しい。専門書ではこうはいかないだろう。

次章では「なぜ動物を見るのか?—化身・同化・他者」と題して、動物をめぐる日米の文学作品6点をテキストに、単にネイチャーライティングの作品・作家紹介に留まることなく、6点の作品それぞれが投げかける生き物との交感について考察されている。文学というフィールドのすばらしいインタープリターである著者の野田氏とともに、ネイチャーライティングというトレイルをたどり、生き物を通じての自然と人間のかかわりについて考えるおもしろさがここにはある。

さて、最後の章はいよいよズバリ「ネイチャーライティング」というタイトルなのだが、この章に割かれているページは非常に少なく、全体の10分の1にも満たない。しかし、「文学が環境破壊に危機感を覚えるとすれば、そこに大きな理由があるのです。それは文化の危機なのです。」という言葉で結ばれる本章は、地球環境問題をかかえる現代にあって、ソローの「ウォールデン」を祖とするとされる「ネイチャーライティング」の意義について簡潔に語られており、本分野のさらなる研究と日本文化への定着が今後ますます重要になってくることを予感させる内容となっている。

このように、本書はその役割として「ネイチャーライティング」のおもしろさと幅広さを解りやすく伝えるだけではない大きな可能性を持っていると思う。文学や自然、環境に興味のある学生や教員のみならず、公私で自然にかかわる一般の方や、環境保全や自然体験活動にかかわる方にも一読をお勧めしたい。

書評 ローレンス・ビュエル著『環境批評の未来—環境危機と文学的想像力』伊藤詔子、横田由理、吉田美津、三浦笙子、塩田弘訳、(音羽書房鶴見書店、2007)。

Buell, Lawrence. *The Future of the Environmental Criticism: Environmental Crisis and Literary Imagination*. Malden: Blackwell. 2005.

「文学と環境の相互作用に向けて」

小谷一明 (県立新潟女子短期大学)

この度、待望の翻訳書が登場した。これまで部分的には紹介されてきたが、ローレンス・ビュエルのエコクリティシズム3部作中、一冊全てが邦訳されたことはなかった。著作に書き込まれる膨大な情報量が、翻訳の作業を躊躇させてきたのかもしれない。『環境批評の未来』は、この大きな課題に挑戦する翻訳である。この作業を支えたものが、伊藤詔子氏を中心としたASLE-Japanの分科会活動であった。伊藤氏の後書きにもあるように、横田由理、吉田美津、三浦笙子、塩田弘氏の共訳者、そして翻訳の助言者である浅井千晶、松永京子氏らの知的研鑽が本書に結集している。これにより丁寧で良質な本文および文末の「訳注」が生まれ、研究者を主とする読者にとってきわめて読み応えのある読書体験を与えてくれる書物になっている。ビュエルの仕事を長きにわたり追いかけてきた伊藤氏の熱意が、この訳書全体に加味されていることは言うまでもない。

ここからは『環境批評の未来』についていくつか内容を紹介していきたい。全体としては本書の最初と最後にエドワード・サイードのテキストが言及されているように、これまでのエコクリティシズムに、サイード批評の成果がより明確に接ぎ木されているという印象を受けた。とりわけビュエルが第二派エコクリティシズムの特徴と考える環境正義やアーバン・ネイチャー批評と結びつけた、レトリックと実践の連続性において、サイード批評とエコクリティシズムの近さが指摘されている。第二章「世界、テキスト、そしてエコクリティック」では、たとえば入植者のテキスト空間と、それにより「何もない」と表象された場所に住む者のそれとの間にある量的な非対称性をふまえること、この量的な違いが質的な違いへ還元されることを、エコ批評家が理解するように求められている。テキストという世界・環境の「構築的」な要素に焦点を当てながら、非対称な世界を反転させるために「環境的レトリックをパフォーマンスに繋ぐ」可能性が模索されていく。

このように第一派のエコクリティシズムで展開された文学作品における自然表象の分析、ミメシス理論の限界点を越え、世界を恒常体としてではなく歴史的に変容するものとして把握する方向性をビュエルも開いていく。具体的にはサミュエル・ベケット著『ゴドーを待ちながら』などの「近代のエコ演劇」作品が移動し、上演においてテキストがそれぞれの場所と化学反応を引き起こす事例などが紹介されていく。文化コードに埋め込まれた場所を、テキストが再コード化(上書き)するという議論は、まさに環境と文学の関係を研究する点で今後さらに注目されそうである。一方で、ローカルな事例を大切にしている傾向が、地球温暖化といったグローバルな問題にどのような結びつきを持てるのかという問いが残る。そこでビュエルは局所的な場所論では対応できない世界的な環境変化に対応すべく、第三章において、空間と場所の用語で人類史を語る試みから議論を行っていく。ここでもやはりサイードを援用しながら、旅する歌や物語をとおして、複数の場所が重なりあう文化的な混交性が、グローバリズムに対抗する戦略的な空間となる可能性が示される。

ビュエルはこれまでのエコクリティシズム、そして環境批評の多様性を狭めないように留意しながら、石牟礼道子『苦海浄土』をはじめとして世界各地の作品を紹介していく。本書は格好の読書案内としての面もあわせ持つが、これにより環境人文学における理論的な構築が遅れないよう、領域横断的に批評が引用されている。「著者まえがき」でエコクリティシズムではなく環境批評という表現を用いたいと述べているが、そこではよりよい環境文学研究の「環境」作りが意識

 2008年度 ASLE-Japan /文学・環境学会全国大会を九州で開催します。

2008年度日本アメリカ文学学会全国大会（会場：西南学院大学）終了後に開催を予定しています。

とき：2008年10月12日（日）～10月14日（火）の予定

ところ：久住研修センター（12日夕方に福岡よりバスで移動の予定）

研究発表を募集します。タイトル、発表要約（800字程度）、連絡先を大会実行委員長の高橋勤さん（九州大学）までお送りください。

送付先：〒810-8560 福岡市中央区六本松 4-2-1 九州大学大学院言語文化研究院 高橋勤

締切：2008年4月28日（月）必着

 事務局が変わりました！

新事務局

県立新潟女子短期大学 小谷一明

〒950-8680 新潟県新潟市東区海老ヶ瀬 471 番地

研究室電話 025-270-3351 / ファックス 025-270-5173

E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp

Niigata Women's College

Kazuaki Odani


471 Ebigase Higashi-ku Niigata-shi Niigata JAPAN 950-8680

TEL: +81-25-270-3351 / FAX: +81-25-270-5173

E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp

◆会費納入のお願い

会費未納入の方は、至急、下記郵便口座へお振り込みください。（一般 5,000 円、学生 2,000 円）

	口座番号 01300-0-93821 加入者名 文学環境学会
---	-----------------------------------

*** 寄贈図書 ***

次の図書を学会に寄贈していただきました。お読みにになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。
なお、送料はご負担ください。

- ・ ローレンス・ビュエル著『環境批評の未来：環境危機と文学的想像力』伊藤詔子、横田由理、吉田美津、三浦笙子、塩田弘訳、音羽書房鶴見書店、2007.
- ・ Jonathan Mack、岩政伸治、市岡伸夫、大野美砂、坂内太、内田均著『Different Histories-もう一つのアメリカ現代史 12 章』金星堂、2007.
- ・ 日本アメリカ文学学会関西支部編『関西アメリカ文学』44号、2007.

追悼 秋山健先生 野田研一（立教大学）

ここ数年、日常の繁忙にかまけ、学会などへの参加もおぼつかなくなっており、秋山先生にお目にかかる機会も少なくなっていた。訃報はそんな虚を衝くかのように届き、私はたじろいだ。

秋山健先生は、長年、上智大学文学部教授（アメリカ文学）として教鞭を執られたのち、プール学院大学に移られた。秋山先生は学会設立以来、ASLE-Japan の役員そして最初の顧問として学会をサポートして下さっていたが、じつのところ、ASLE-Japan と秋山先生との関係は学会設立の 1994 年以前に遡る。1993 年、当時、初代 ASLE-US の会長であったスコット・スロヴィック氏（現ネヴァダ大学教授）がフルブライト招聘教授として来日し、立教大学、上智大学、東京大学でネイチャーライティングに関する講義を行った。これこそ日本の大学における最初のエコクリティシズム講義なのだが、この招聘に尽力されたのがほかならぬ秋山先生だった。

滞日中、スロヴィック氏は北は北海道から南は沖縄まで全国行脚し、やがてその人脈が ASLE-Japan の設立に繋がる。秋山先生はその設立前夜の準備会作業にも欠かさず参加して下さり、学会の事務的な機構の問題から、本質的なあり方の問題にいたるさまざまなご意見や助言をいただいた。

なかでも二つ、どうしても忘れられないことがある。1つは、学会の日本語名称変更である。設立当初、ASLE-Japan の日本語名称は「文学・環境研究会」であった。当初 40 名足らずでスタートした小さな組織であったための遠慮がちな命名であった。しかし、秋山先生は、早く名称を学会に切り替えるべきだと力説され、いまに至っている。

2つ目は、「普通の学会になってはダメですよ」というご発言である。放っておけば、学会はただ便利な研究発表の場に過ぎなくなり、本質的な議論を交わすことなどなくなる。ASLE-Japan の大会は、基調講演から個別研究発表までつねに同一の部屋で行っている。沖縄や金沢のような規模の大きな国際大会ですら暗黙の裡にこの原則を守っている。つまり「普通の学会」にならないための一種の原則がそこにあるからだ。

秋山先生は、ASLE-Japan が「普通の学会」になったら意味がないと考えておられた。それは環境という問題がきわめて重要な問題であり、その議論に自明なものは何一つなく、むしろこれから作りだしていかなければならない未成の分野であるからだ。また、これは輸入学問でこと足りるような問題でないことも力説しておられた。一つ一つの事柄を、丁寧に、権威ぶらずに議論することの大切さ、思潮に振り回されない議論の重要性を私たちに説いておられた。

7 月、ブラウン大学のバートン・L・セントアーマンド教授が来日され、数年ぶりにお目にかかった。セントアーマンド先生と秋山先生は長年にわたる親交で知られている。そして、スロヴィック氏がセントアーマンド先生の直弟子であることも。セントアーマンド先生からはその後、“In Memoriam: Ken Akiyama” と題する詩が届けられた。秋山先生からいただいた ASLE-Japan への貴重な贈り物の数々に改めて感謝の気持ちを捧げたい。

【編集後記】

前号の編集後記では、金沢シンポの折、「夜ともなれば、どこからか風に乗って盆踊りのお囃子が聞こえてくる（はずだ）」などと記したが、あにはからんや、夜中に聞こえてきたのは季節はずれの激しい雷鳴だった。驚いて飛び起きた方、その後は一睡もできなかったという方も多かったのではなかろうか。もっとも、「熟睡していて全然気がつかなかった」という強者、「雨の中なのに、お祭りの花火か太鼓の音だと思っていた」という猛者（いずれも女性、特に名を秘す）が、それぞれ一名ずついらしたことが判明した。ASLE-Japan の未来は明るいと言わざるをえない。

23 号は金沢シンポの特集号とさせて頂いたが、それ以外にも、会員の皆様のご協力を得て、相変わらずの盛りだくさんの内容となった。ご投稿下さった方々、執筆の依頼に快く応えて下さった方々に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

来秋は高橋勤さんのお力添えにより、日本アメリカ文学学会全国大会に引き続き、九州の地で全国大会が開催される予定である。阿蘇の山懐に抱かれて、楽しい語らいのひとつときを持てることを今から楽しみにしている。

北陸はこれからいよいよ「雪起こし」、「鰯起こし」と呼ばれる雷の季節に入る。それぞれ、雪の前触れとなる雷、鰯の豊漁を告げる雷の意である。（K.M）

【発行】

ASLE-Japan/文学環境学会
代表 生田省悟
事務局：県立新潟女子短期大学 小谷一明
〒950-8680 新潟県新潟市東区
海老ヶ瀬 471 番地
研究室電話：025-270-3351,
FAX:025-270-5173
E-MAIL: kodani@da2.so-net.ne.jp

【編集】

編集代表 村上清敏
〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学文学部（総合教育棟）
Tel: 076-264-5827, Fax: 076-234-4170
E-mail: melville@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

